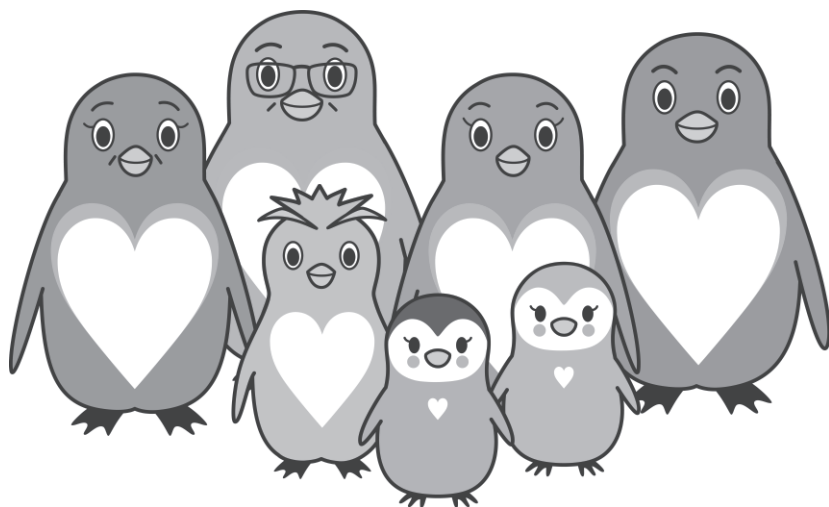


養育家庭（里親）体験発表集 （令和7年度）



東京都里親制度普及啓発キャラクター

「さとペン・ファミリー」



東京都福祉局子供・子育て支援部

「養育家庭（里親）体験発表集」の発行に当たって

都内には、様々な理由により親と暮らすことのできない子供が約 4,000 人います。そのような子供を、自らの家庭に迎え入れ、家庭と同様の環境で育てているのが「里親」であり、東京都では里親制度の普及に取り組んでいます。「養育家庭」は里親制度の一つで、養子縁組を目的とせず、一定期間子供を育てる家庭です。

毎年、東京都は各区市町村と協力し、各地で養育家庭（里親）体験発表会を開催しています。この冊子は、養育家庭や、養育家庭で育った元委託児童の皆さんの発表内容をまとめたものです。

里親になろうと思ったきっかけ、委託されていた時の児童の思い、交流・委託中の思いがけない出来事や慌ただしい日々の様子などが描かれています。様々な御苦労の中にも、子供が少しずつ家庭になじんで心が通じ合っていくのが実感でき、里親をやっていて良かったという話や、悩んだ時に里親仲間や児童相談所の職員などから支えてもらった話など、里親だからこそ味わえる子育ての素晴らしさにも触れています。

より多くの都民の皆様にお読みいただき、都内における養育家庭（里親）に対する理解を深めていただく契機になれば幸いです。

令和 8 年 9 月

東京都福祉局子供・子育て支援部育成支援課長

六 串 知 己

目 次

1	共働き夫婦のチャレンジとおつり	2
2	“短期里親”としての経験談	7
3	子育て、親育ち	14
4	うちにきた天使	26
5	人生を一変させた私たちのダイブ ～にぎやかでありふれた冒険のはじまり～	33
6	“親”からもらった愛情が力になる	40
7	共に生きる	45
8	A君と歩んだ日々	51
9	里親家庭に生まれて	55
10	子どもって おもしろい	60
11	みんなで育てる、みんなが育つ	67
12	明るい未来へ	74
13	里親を志した日、里親としての日々	81
巻末資料	Q&A、アンケート結果	87

養育家庭（里親）体験発表会へようこそ！

本書は、養育家庭体験発表会当日の発表内容を要約したものです。

より多くの方々に、里親制度を知っていただき、ご理解と共感を得られることを、何よりも願っています。

それでは、里親さんと子供たちの生活の一部をご覧ください。

1 「共働き夫婦のチャレンジとおつり」

発表者：里親（40代）

家族構成：里親、委託児童（3歳女の子Oちゃん）

里親歴：4年

今日は我が家の里親としてのこれまでの経験をお話させていただきます。里親になったきっかけは、大人2人の生活も十分楽しいけど、せっかくなら残りの人生、誰かのために生きてみたいなという気持ちが出てきて、里親になることを考え始めました。まずは里親に近い形のフレンドホームからやってみました。うちもできるかもとだんだん気持ちが傾いていって、フレンドホームの交流と並行して、里親登録に向けて動き出すことになりました。

里親登録後2～3か月でお話をいただいて、その1か月後ぐらいに女の子のOちゃんをご対面でした。Oちゃんは当時1歳2か月で、初めましてのときは特に私たちを嫌がる様子は全くなく、かといって泣きもせず、笑いもせず、表情からは何も読み取れませんでした。私自身はそのとき会えたといううれしい気持ちと、いよいよ始まるなという何とも言えない不思議な気持ちでした。

乳児院では、最初はOちゃんが普段生活している場所で、お部屋の中やお庭に出て、遊具などで遊んで、その後お昼ご飯を食べるのをお手伝いしてという感じでした。少し慣れてきてからOちゃんと私たちだけで、面会室の中で一緒に過ごしました。Oちゃんはこの時期、ちょうど歩き始めた頃だったので、面会室のソファとか、低いテーブルが置いてあるところを動き回るのをハラハラしながら見

守ったり、食事の介助をしたりというのが、私たちは慣れてなかったもので少し大変でした。

2時間位の面会をしばらく繰り返した後、最後に丸1日一緒に過ごして、お風呂やお昼寝の練習をして、それが終わるといよいよ我が家へとなりました。最初は日帰り外出から始まり、次に1泊2日で、その次は2泊3日という感じで、うちで一緒に過ごしました。最後は1か月間の長期外泊になります。

この期間はまだ委託前なので、基本的に毎日自分たちだけで見ていないといけません。かといって、1か月丸々仕事を休むわけにもいかないのです、何とかその1か月はやりくりしながら、仕事は短時間勤務に切り替えたり、有給休暇もフル活用してどうにか乗り切りました。長期外泊終了と同時に正式委託となり、Oちゃんとの生活が本格的に始まりました。

Oちゃんはその頃になると、最初の頃の無表情の様子がうそのようになくなって、毎日泣いたり、笑ったり、怒ったり、大忙しで、自分の言いたいこともどんどん言えるようになっていました。うちに来たとき、すぐに保育園を探す必要があり、もろもろ申請書類をそろえたり、近所の認可保育園の空きがなくて、少し離れた認可外の保育園に半年通ったりとかしていて、随分あたふたしてしまっただけですが、フォスタリング機関の方々が結構手厚くサポートしてくださって、何とか頑張れました。

Oちゃんは保育園では割とすぐに新しい環境になじんで、周りのお友達とか、先生からいろんな刺激を受けて、家ではもう到底私たちが教えてあげられないようなことを日々学んで吸収しているよう

です。

私の実家が電車で1時間半くらいのところにあって、月に1回くらいのペースで、母が〇ちゃんに会いに来てくれます。母はもう〇ちゃんのことが大好きで、かわいくて仕方がなく、〇ちゃんのほうもばばちゃんのことは大好きで、お互い毎月会えるのを楽しみにしています。ばばちゃんは〇ちゃん会いたさに、毎日頑張って元気で長生きしなくちゃと思ってくれているので、私としては少し親孝行ができていいのかと思っています。

次は、里親家庭ならではの話ですが、〇ちゃんは産みのお母さんとの交流があるお子さんで、実母さんと定期的な面会交流が設定されていますが、なかなか予定どおりには会えず、機会があれば、写真やお手紙なんかでやり取りをしています。

〇ちゃんには、お母さんが私のほかにもう一人いるという話はふだんから時々していて、まだよく分からないかもしれないけれど、少しずつでも、どうやら自分のことを大事に思ってくれるママが私には2人いるみたいということを、〇ちゃん自身が肯定的な気持ちで受け止められるように伝えてあげられたらいいなと思っています。その手段の一つとして、児童相談所の方がうちに委託になるタイミングで作ってくださった手作り絵本があります。〇ちゃんが生まれたときからうちに来るまでの物語が写真つきで描かれているかわいらしい絵本と、これも児相の方が作ってくださったのですが、実母さんと面会交流したときの様子をスクラップブックにしてくださっていて、その2冊を〇ちゃんがいつも読んでいるほかの絵本と一緒に絵本棚に置いていて、時々そこから取り出して読んでいます。

あと、名前は、今のところ保育園では通称姓ではなく、実親さんの姓をそのまま使っています。里子はどっちの名字を使うかというのは、それぞれ家庭の事情とか、本人の希望とかがあると思いますが、まだ判断できてなく、今は戸籍の名前で特に問題ないですし、本人が嫌な思いをしている様子はないので、しばらくはこれで様子を見ていこうかなというところです。

周りの方たちには、うちは里親家庭ですというのは基本的にはオープンにしています。保育園の先生には、事前にここまでの方たちにお伝えしましょうというのを決めて、そのとおりにしていただいています。

今後について思うこととして、Oちゃんがこれからいろんな自分の状況を理解するようになってくると、いろいろ悩んだりもすると思うので、そういう場面で私たちがどうやったら寄り添ってあげられるのかというようなことはよく考えています。将来、Oちゃんが、Oちゃんらしく自立して生きていくために、どうやったら彼女の個性とか能力を引き出してあげて、それをどうやって伸ばしてあげられるのかなと考えたりしています。

あとは、同じくらいの年頃の里子を養育している里親さんとの交流がなかなかなくて、そういう出会いがこれからあるといいなというのと、Oちゃん自身もなるべく小さいうちから同じような境遇の子と仲よくなって、いろんなことを共感できたり、相談できたりする仲間がこれから増えていくといいなという希望があります。

最後に、子供の成長って本当に早いです。昨日できなかったことが今日はもうできているということばかりで、心の発達を感じるこ

とも多くて、すごく成長が見られる場面が多々あります。私自身も〇ちゃんのおかげでどんどん変わってきていて、この間までこんなこと思いもしなかったのにというようなことがあって、もう気づいたら物の見え方が180度変わっているというようなことも多くて、そんな変化を私はすごく楽しんでいます。欲を言えば、もっとああすればよかったなとか、あのときああいう言葉をかけてあげればよかったなとか、振り返ればもう既にいろいろあるのですが、それでも〇ちゃんが私たちと一緒に毎日過ごして、安心してたくさん甘えてきてくれている姿を見ると、日々の小さいいろんなことの積み重ねで、ここまで来ているのかなというふうに思います。

私は三、四年前に、里親をやってみたいけど、でもうち狭いし、共働きだしなとか、しばらく悩んだり、迷ったりしていた時期があったのですが、そんな間にも小さい子供はどんどん成長しちゃっていたんだろうなと思うと、その時間がもったいなかったなと今は思います。

子供の時間は止めることができないので、待っている子供たちが少しでも早く里親さんと出会えるといいなと、それから、そしてこんな楽しい変化を共有できる方たちが、これからどんどん増えていったらいいなと思っています。

2 「“短期里親”としての経験談」

発表者：里親（60代）

家族構成：里親

里親歴：4年

皆さんは「里親」と聞いて、どんなことを思い浮かべますか。おそらく、様々な事情により家庭で暮らせない子どもを自分の家庭で成人するまで育てていく、そんな養子縁組里親や長期でのお預かりを想像される方が多いのではないのでしょうか。

私はこれまで児童相談所からの依頼を受けて、数週間から数ヶ月の短期で子どもをお預かりする「短期里親」として活動してきました。短期でのお預かりと聞くと、少し特別なように感じられるかもしれませんが。しかし「より多くの子どもたちと関わっていきたい」「その子どもたちが安心して過ごせる場所になりたい」そんな思いがあって私はこの形を選びました。

里親という存在を初めて意識したのは、テレビのニュース番組で里親の特集を見たことがきっかけでした。長年、保育園や幼稚園、幼児教室などで子どもと関わる仕事をしてきて、「これからもずっと子どもに寄り添っていきたい」「これまでの経験を生かしていきたい」「子どもの笑顔に囲まれていたい」そんな思いがずっと心の中にありました。そして、色々調べていくうちに「自分にもできるかも知れない」そう思うようになり、里親登録に至りました。

里親に登録してからもうすぐ4年になります。今まで委託した子どもの年齢も性別も性格も、そして我が家に来ることになった経緯

も本当にそれぞれ違います。今日は「短期里親」として子どもたちをお預かりしてきた中で、短い期間でも子どもたちと過ごした時間が温かく幸せで学びの多い時間だったかをお伝えできればと思います。

最初にお話するのはA君です。

A君が我が家に来たときは、まだ歩き始めたばかりのヨチヨチ歩きでした。人見知りもなく、すぐに我が家に馴染んでくれたA君は、1歳にしては驚くほど聞き分けがよく、手のかからない子でした。きっと少し緊張の多い生活をしてきたのだと思います。

児童相談所の方からは、「食事はあんまり食べたがりません」「夜はなかなか寝付きません」と聞いていたのですが、実際は好き嫌いなくよく食べ、夜もぐっすり眠る子でした。我が家ではできる限り、夫と私そしてお預かりしている子どもと3人で一緒に食卓を囲みます。夫婦揃って食べることが好きなので、私達が美味しそうに食べる姿を見て、A君ももしかしたら影響されたのかもしれませんが。

天気の良い日は公園で遊ぶのが日課でした。最初はヨチヨチとおぼつかない足取りでしたが、毎日お散歩を重ねるうちに、どんどんとしっかりとしていきベビーカーを使うことも少なくなりました。手を繋いで歩きながら歌を歌ったり、お喋りをしたり、公園までの往復の時間は私にとってもとても楽しい時間でした。この時期の日々の成長は著しく、昨日できなかったことが今日ではできるようになっている、そんな成長していく姿をそばで見守ることができるのは喜びであり、楽しみでもありました。

そうした何気ない日々の中でA君はどんどんと成長していき、最初の印象の「おとなしいA君」は、明るくよく笑い自分の思いはしっかりと主張するはつらつとした男の子へと変わっていました。小さな体の中に確かな成長と「安心して甘えられる場所」ができていたのを感じました。

次にお話するのは2歳だったB君です。

委託前に児童相談所の方からは、「多動でじっとしてられない」「思い通りにならないと癇癪を起こす」「偏食がひどく、食べたくないものは投げる」など、少し身構えてしまうような話を聞いていました。ところが、実際に生活を始めてみると、食欲旺盛で好き嫌いなく何でもよく食べ、食事の時間も落ち着いていて「ごちそうさま」をするまではきちんと座って食べていました。ただ、多動の傾向はやはりあって、来た当初はじっとしていることがまずありませんでした。テレビ台の上に乗ったり、テレビにぶら下がったりと、とにかく目が離せませんでした。

そんなB君でしたが、危ないということを根気強く繰り返し伝えていくうちに、いつの頃からか全くしなくなっていました。「ここはダメ」「あれは危ない」など禁止用語が増えてしまうのが嫌でしたので、やはり公園へ毎日のように出かけ、思い切り遊ぶようにしました。

思い通りにならないと癇癪を起こすこともありました。ショッピングモールの通路や雨の日の道路の真ん中で大の字になって泣いてしまうこともありました。でも、無理には止めようとはせずに、世間の目が気になりつつもたわいもないお喋りをしながら、落ち着く

まで待つようにしました。するとしばらく経つと自分から泣き止みケロッとしていました。今となっては笑って話せる思い出です。

最初は表情が乏しかったB君でしたが、いつの間にか表情も豊かになり、ニコニコ笑うことが増えました。外出先でも「かわいいね」と声をかけてもらうことが多くなり、そのたびに私達も自分達が褒められたような幸せな気持ちになりました。

そして、お別れが近づいた頃、B君がおままごとのフライパンで野菜のおもちゃを炒める仕草をしていました。いままで集中して何かで遊んだことがなかったB君が、です。その瞬間、「成長したな」と胸がいっぱいになりました。毎日私がお料理している姿をじっと見ていたので、きっと真似をしたのだと思います。あの姿は今でも心に残っています。

最後に、小学生のCちゃんとの半年間の生活についてお話します。

Cちゃんが我が家に来たときは、家族に対する思いがとても強く、現状を受け入れつつも、なぜ自分が里親の家で過ごさなければならぬのかとどこか戸惑っている様子でした。影が薄く儚げで、今にも消えてしまいそうな子でした。笑顔を見せてくれるものの、どこかぎこちなく作ったような笑顔に見えました。

しかし、日を追うごとに少しずつ表情が柔らかくなり、それと同時に感情をしっかりと表現できるようになってきました。最初は学校の話聞いても「わからない」としか答えてくれなかったCちゃんでしたが、自分から色々と話してくれるようになりました。笑い声をあげて心の底から楽しそうに笑うようにもなりました。面白いことに、里父である夫には学校での愚痴のような話が多く、私には

楽しかったこと、将来やりたいことなどの話をよくしてくれました。なぜか2人の間で話を分けている様子が微笑ましかったです。

夫は元々私の里親登録の相談に二つ返事で賛成してくれた人で、思いがけず里父になったわけですが、どの子にも惜しみなく愛情を注いでくれています。むしろ子どもたちとの時間を心から楽しんでいる様子です。

夫は、Cちゃんともよく出かけていました。2人で買い物に行っては、夫はたいてい「内緒ね」と言ってお菓子を買ってあげていました。買い物から帰ってくるとCちゃんがニコニコしながら「今日は内緒の買い物していないよ～」と言うのですが、「買ってきました！」という顔をしていて、親しい誰かとの内緒の共有が嬉しそうでした。

半年の間にCちゃんは見違えるほどたくましくなりました。最初の儂げな印象はすっかり消え、甘えたり、わがままを言ったり、不貞腐れたりもできるようになりました。

私たちは、子どもが話してくれることを決して否定せず、まず受け止めるようにしています。私たちにとっては驚くような話でも、その子にとっては日常なのです。私たちはCちゃんにとっての思いを全て受け止める存在でありたいと思っていました。

「今日は子ども天国だ～！」Cちゃんの口癖です。嬉しいこと、楽しいこと、美味しいことがあるといつもそう言っていました。どうかこれからも、Cちゃんの人生に子ども天国の日々がたくさんありますように、そう願わずにはられません。

この数年間、まだおむつをつけていて離乳食がやっと終わったヨチヨチ歩きの赤ちゃんのママになったり、元気いっぱい常に関心しているやんちゃ盛りの男の子のママになったり、ちょっぴり甘えん坊で泣き虫な小学生の女の子のママになったり…。実際はもう“ばあば”な年齢ではありますが、いろいろな経験をさせてもらいました。

短期のお預かりなので、子ども達はいずれそれぞれの場所へ巣立っていきます。「別れは辛くありませんか？」「ロスはないですか？」とよく聞かれます。もちろんロスがありますし、寂しさもあります。でも、私たちのもとで安心して過ごし、何かを得て前を向いて新しい環境へと歩んでいってくれるその姿を見るのが一番の喜びで、ロスよりもその喜びのほうが大きいのです。

もしかしたら、里親の家で過ごしたことや、私たちのことも忘れてしまうかもしれません。それでもいいと思っています。多くの人の愛情に包まれ、大切に思われて過ごした日々が、心のどこかに残っていてくれればそれで十分です。私たちは、何も特別なことはしていません。ただただ寄り添い日常を共に過ごしてただけです。特別なことをしなくても誰かの「安心の場所」になれるのではと、そうと思っています。

後日談になりますが、我が家のトイレに造花の観葉植物が飾っているのですが、小学生のCちゃんが巣立って数日後、その植木鉢に水が入っていることに気づきました。きっとCちゃんが、私たちが毎日花に水をあげているのを見て、造花にも水をあげてくれたのでしょう。そんな小さな出来事にも心が温かくなりました。

そして、Cちゃんの通っていた小学校で仲良くしていたお母さんと、先日ばったり道で会いました。その方が、「私たちの活動に背中を押され、以前から気になっていた児童養護施設のボランティアを始めました」と話してくれました。間接的にでも、誰かの「子どもたちの笑顔のための行動」につながったと思うと、とても嬉しかったです。子どものためにと思い始めたことでしたが、一緒に過ごしている時間も、巣立った後も、実は私たちのほうが子どもたちからたくさん幸せをもらっているのだと感じています。

里親を必要としている子どもたちがいること、そして、その子どもたちと過ごした日々のお話をお伝えする機会をいただき、本当にありがとうございました。

3 「子育て、親育ち」

発表者：里親（60代）・実子（30代）

家族構成：里親、委託児童（20歳男子・9歳女子）、実子5人

里親歴：25年

【里親】

皆さん、こんにちは。体験発表ということで大変緊張しておりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

私たち夫婦は里親に登録させていただきまして25年になります。主人が44歳、私が40歳のときでした。年齢からして決して早いほうではないと思います。

里親になろうと思ったきっかけは、私たちの知り合いの方で既に里親されていた方から「里親やってみない、里親やろうよ」と何度か声をかけていただいたことです。ですが、うちは実子が5人おりまして、一番下の子はまだそのとき保育園の年中さんでしたので、その子が中学生ぐらいになったら考えようと思っていました。

その後、我が家に二つの事情が起きました。

一つ目は、実子の2番目の子が登校拒否になってしまいました。中2のとき、クラスの男子生徒にからかわれ、それが原因で学校に行けなくなりました。本人は本当につらかったと思います。本人の希望で転校し、新たに再出発することができましたが、このとき、子供を一番守ってあげられる親がいなかったら、その子は誰を頼ればいいのかと思いました。

二つ目は、同じ頃私が献血に行きましたら、ひどい貧血状態で、

「あなた献血どころではない、すぐに病院に行くように」と言われました。病院でも何でもっと早く来なかったのかと医師に叱られるほどでした。結局、子宮摘出の手術をすることになりました。その後、検査などで病院に行くたびに医師から「子宮を取るということは、もう実子さんは望めませんよ」と言われました。そのときに、子供は産めないけど、育てることはできるのかなと思ったのです。

二つの事柄を通して、里親にならせていただこうと思い、主人や家族に相談して登録に至りました。

これまで長期、短期、緊急など大勢の子供さんたちと関わってまいりました。中には、小学校の卒業式の前後1週間だけ預かってほしいと依頼されたお子さんが、急に1年間預かることになりまして、このときはさすがに大変でした。中学校ですから、入学式までに制服から上履き、通学バッグに至るまでいろいろと用意しなければなりません。制服だけはさすがに間に合わず、中学校の校長先生が学校にあった見本の制服を出してくださり、本人が着れそうなものをお借りして、何とか間に合わせました。

反対に、我が家に来て1日もたたずに事情が収まり、戻られたお子さんもありました。特に緊急は児童相談所から依頼の電話が来て、1時間足らずで連れてこられるケースも多かったです。依頼の電話が来ると、緊急家族会議をして返事をします。

もちろんお断りすることもできましたが、子供たちの返事は大体が「お父さん、お母さんがよければいいよ」とのことでした。受け入れるこちらは大変ですが、事情あって見ず知らずのご家庭にいきなり連れて来られるお子さんはもっと大変だろうにといつも思って

いました。

そんな中、今日は、里親になって初めて長期でお預かりしたお子さんとの話をさせていただきます。

里親に登録したてはすぐにでも依頼が来るのかと思っていましたが、1か月、2か月と何の連絡もなく、実子たちはいつ来るの、いつ来るのと待ちわびておりました。半年後、ようやく3歳になったばかりの女の子、A子との交流が始まりました。交流も数か月がたち、お互いに慣れてきたところで1泊のお泊まりを繰り返して、うちや家族にも慣れてもらいました。

施設でA子を担当してくれていた先生を、彼女は自分の母親のように慕っており、外泊中も先生ならこうしてくれたよ、と何かにつけ比べられておりました。先生が大好きだったんですね。ですから、いよいよこれで施設とも別れのとき、さようならと言わなければならないところ、私はいつてきますとしか言えませんでした。さよならと言ったら、行きたくないと泣かれるんじゃないかと思ったからです。

最初は、家族で割れ物にでも触れるかのように気を遣いました。それでも子供は順応性が高いですから、すぐに慣れてきました。なかなか慣れなかったのは、お父さん、お母さんの存在でした。最初の頃、大人は皆、先生、先生と呼ばれていました。

あと、私も5人の子を育てていますので、3歳なら夜は9時頃には寝るよなど、布団をひいて豆電にして寝かそうとするのですが、おしゃべりが止まりません。寝たら不安になるのか一向に寝ようとせず、毎晩布団に入ってから寝るまで2時間ぐらいかかりました。

我が家の生活に慣れてくると、講習で教えてもらっていた赤ちゃん返りや、試しの行動が出てきました。施設では取れていたおしめの復活や、部屋から隣の部屋に移動するにもだっこ、私が荷物で両手がふさがっていてもだっこ、自分の気に入らないことがあると1時間泣き続けたり、これでもかと言わんばかりに、こんな私でも見てくれるのと、本当に試されているようでした。彼女の心の中には、施設の先生のことがなかなか忘れられなかったのかもしれませんが。

A子が小学校に入学する前に、赤いランドセルをしょって、1年生になりますと、先生に報告に行こうということになりました。A子は先生のことを忘れていませんでした。施設について先生にお会いして、飛びついていくかと思ったらピタッと止まり、先生をじっと見詰めていました。先生はにこにこしながら、腕に施設のかわいいお子さんをだっこしていたんです。それを見たとき、A子は私の手の小指をギュッと握りしめて離しませんでした。あのときの彼女の反応は忘れられません。子供心に、私の先生は私だけの先生じゃないと感じたのでしょうか。

その日、施設から帰るとき、お世話になりました。ありがとうございました。そして、さようならとお別れの挨拶をさせていただくことができました、私たちの心の荷も少し軽くなりました。

その後、本人が中学2年生の頃に自分のルーツを知りたいと言い出し、児童相談所の方に相談して、お世話になった乳児院、施設とも連絡を取り合い、回らせていただくことになりました。乳児院では、A子が乳児院の頃の写真に写っていた遊具がそのまま使われていたことに感激したり、A子をお世話してくださった先生が

まだその施設にいてくださり、自分が小さい頃の話をとくさん聞けてうれしそうでした。

施設でも大好きだった先生に久しぶりに再会できました。先生は既にほかの施設に異動されていましたが、A子ちゃんが来るならと元の施設に会いに来てくださいました。ゆっくり彼女の成長を見ていただき、会話も弾んでいました。大勢の方々からかわいがられて大事に育てられてきたことを感じたようです。

話は戻りますが、A子が小学4年生の頃です。二人でお出かけした帰りの電車の中で突然「お母さん、お母さんは私より早く死なないでね」と言ってきたことがありました。「えっ」と動揺しましたが、「お母さんはバケモンじゃあるまいし、あんたより長生きできるわけないじゃん」と言うと、A子は笑ってくれましたが、また真剣な顔になり、「じゃあ、私の産んだ子は見てくれる」、「当たり前じゃん、ちゃんと見てあげるよ」と、それだけ言うのが精いっぱいでした。A子の心の中を知り、私たちが計り知れないほど、不安な気持ちでいっぱいなんだ。こんなこと心配して、それをまた口に出さないと不安で仕方なかったのか。まだまだあなたは10歳だよ。本当に切なくなりました。お母さんたちはいつもあなたの味方だよと、少しでも安心させてあげたい。この子の将来が何とか幸せになってほしいと願いました。

そうかと思うと、子供とはいえ口が達者と申しますか、頭の回転も速く、こちらの言うことは分かっているんだろうけど素直に聞いてくれない。わざとこちらがいらいらするような態度を取り、子供相手に私も興奮してきてますます声が大きくなってきます。そうす

ると今日いる息子が「まあまあお母さん、お母さん」と仲裁に入ってくれます。けんか後は大人げない自分を反省しますが、でもこちらもすぐにごめんと言えず、でもこのままではいけないと、「A子、アイスでも買いに行こう、靴は履かなくていいよ。お母さんが今日はおんぶしてあげるから」と、十分重くなったはだしのA子をおんぶして、お店でアイスを買ひ、帰りに陸橋の階段で腰を降ろして二人で食べたことがありました。

「親はさ、こんな子が欲しいと選んで産んでくるわけでもなく、子供もこんな親元に生まれてきたいと選んで生まれてくるのでもなく、それは誰にも分からないんだよね。でも、今こうしてA子とお母さんは親子として生活するのも、神様がきっと最高に幸せになれるようにめぐり合わせてくれたんだと、お母さんは思うんだよね」とそんな話をしたこともありました。本人は分かったのか分からないのか、黙って聞いていました。

5人の実子は、A子を迎えたとき、一番上は高校生、2番目、3番目は中学生、4番目、5番目は小学生でした。末っ子はお父さん、お母さんをA子に取られるんじゃないかと、それまでお兄ちゃんと寝ていたのに、急に私たちと一緒に寝るようになったり、A子を座ってだっこしていると、何も言わずに私の膝の上に座ってきました。まだまだ甘えたい時期です。いつも大きな赤ちゃんを二人抱えていたようなものでした。

でも、実子の存在でどれだけ助けられたか知れません。一緒にご飯を食べ、お風呂に入り、遊んで、寝て、けんかして怒られたり窮屈な思いをしたり、当たり前前の普通の生活を楽しみながら成長でき

たんじゃないかと思っています。中には、先ほども申しましたが、子供たちが中間や期末テストの勉強のときなど、A子がうるさくて勉強できないと泣いて訴えてきた子もありました。実子も里子も成長過程で共に育ち、人を思いやる気持ちも育ててもらえたのではないかと思います。

私も子育てには自信がありましたが、その経験がかえって邪魔になり、里子を通して子供っていろんな子がいて、いろんな発想をするんだと、たくさん勉強させてもらいました。里子たちにはそれぞれの生い立ちや過去があります。それを变えることや、消すことはできませんが、運命は変えられるのではないかと思っています。

A子は現在、決して楽とは言えませんが、頑張って生活しています。今でも年に何回か会っていますが、いつも笑顔でいてくれ、うちの家族のことも心配してくれたり、本当にこちらをほっとさせてくれています。

我が家には、現在20歳になる大学2年生の男の子と9歳になる女の子をお預かりしています。5年ほど前、ちょうどコロナが出始めた頃ですが、夫婦で私たちもお互い還暦を過ぎ、里親もそろそろ引退ですねと話していたその数日後、児童相談所から電話が入り、4歳になったばかりの女の子の長期の依頼がありました。4歳と聞き、もっと若い里親さんがたくさんいるじゃないですか、私たちはお互いにかわいそう過ぎますよ。おじちゃん、おばちゃんと呼ばすんですよね。いいえ、やはりお父さんお母さんがいる生活を経験させたいですからと、信じられないようなお話でした。

正式にお預かりして、あっという間に5年の月日が流れました。

いまだに公園や大勢の人の中で「ママー、ママー」と大きな声で呼ばれると、ささっと飛んでいって、一回呼べば聞こえるからと耳元でささやいています。

児童相談所の方々が定期的に訪問してくださり、里親でしか分からない悩み事や、こちらの愚痴も優しく聞いてくださり、アドバイスもしてくださいます。時には、受験後の対応の仕方が分からず、私たちに代わって里子と大学まで連れてっていただいたこともありました。また、里子が自分の実親のことなど、本人が私たちには直接聞きづらいようなことも聞いてもらったり、本当に親身になって対応してくださいます。どれだけ心強いかわかりません。本当にありがとうございます。

私たち夫婦は、実子たちからは「お父さん、お母さん」と呼ばれ、孫には「じいちゃん、ばあちゃん」と呼ばれ、里子には「パパ、ママ」と呼ばれ、この年になって不思議な体験をさせていただいております。

9歳になる里子は非常に好き嫌いが激しく、どうしたら食べてくれるか、頭を抱えています。若いお母さんのようなキャラ弁も作れません。勉強の毎日です。引退どころか、まだまだ子育てが続きそうです。どうもご清聴ありがとうございました。

【実子】

皆さん、こんにちは。本日は里親の実子のお話をということでお声をかけていただき、誠にありがとうございます。

僕も本当に勉強になって、今日来させていただいてよかったなど今実感しています。こういった場も慣れておりませんので、お聞き苦しいところも多々あると思いますが、よろしく願いいたします。

私は里親活動をする両親のもとで元気に育ち、35歳です。現在は、里親活動する両親の家で、妻と娘と同居しています。

私が小学校高学年のときに初めての里子ちゃんが家に来てくれました。先ほどでも話に出ていましたA子ちゃんですね。私たち兄弟は幼い頃から両親に「この世界の人たちは一つの地球に住む兄弟なんだよ。みんなで助け合って生きていくんだよ」と教えられて育てきました。そんなふうで育てられてきた私には、里子ちゃんが来てくれることも、一緒に暮らす兄弟が増えるんだなというくらいで、特に抵抗ありませんでした。上の3人の姉はもう中学生を超えていましたし、私ももう中学生になろうというところ、当時大変だったのは、五つ下の弟かなと思います。先ほどの話の中でもありましたが、A子ちゃんはすごくよく話す活発な子でしたが、夜遅くまで寝つかず、子供たちみんなで寝る寝室ですずっと一人でおしゃべりをしていました。まだ小学校低学年だった弟は眠れないからなのか、親と一緒に寝たかったのか、毎日のようにわんわんと泣いていました。私は弟にもA子ちゃんにも何もしてあげることができず、かわいそうだなと悲しくなる毎日でした。私もこれから大丈夫かなと少し不安になりましたし、当時のその記憶がいまだに忘れられません。

それから私は高校から家を出て、寮生活、大学、社会人と下宿生活をしていましたので、たまに帰省で帰ってくると短期の里子ちゃんが来てくれていたり、また長期の男の子が来てくれていました。その頃になると、両親に対する思いは尊敬になっていました。単純にすごいな、格好いいなと思うようになり、自分もこういう大人になりたいと漠然と思うようになりました。それは幼い頃から両親に教えられてきたことを、両親がまさに背中で見せてくれていたからです。里子ちゃんたちを、まさに家族の一員として育て、あの頃のA子ちゃんはどこへやらと強くしっかりと成長していました。

A子ちゃんは今、当時の元気いっぱいはそのままだ、すてきな大人になって自立をして、新たに人生を歩んでいます。会えばお兄ちゃん、お兄ちゃんと言って、慕ってくれますし、私も当時不安でいっぱいだっただろう妹が今こんなに幸せそうにしているのがうれしくてたまりません。

現在は、私が高校生のときに来てくれた男の子と、小学生の女の子の二人の里子ちゃんと私たち家族も一緒に生活をさせてもらっています。

昔からそうでしたが、特に私の実の姉の次女が、里子ちゃんたちの面倒を親身に見てくれていました。本当に子供が大好きで、いつも自分の時間を割いて、子供たちの目線でいつも接してくれています。一番最近来てくれた女の子を預かるかどうかしようと、両親が家族会議をしたとき、両親は預かるかどうか相当悩んでいました。私はまだ実家に帰ってきていませんでしたし、両親ももう高齢なので、「もうやめといたほうがいい。僕も手伝えることもできないし、お

父さん、お母さんにはもうゆっくりしてもらいたい」と伝えました。何回かお泊まりをして、その女の子が来てくれたとき、私は次女の姉にやっぱり預からないほうがいいんじゃないかなと、この子のためにも、お父さん、お母さんのためにも絶対やめたほうがいいんじゃないと言ったことがありました。そのとき、姉は涙ながらに預かってあげたいと話をしてくれました。私はそのとき、はっとして、それから親に「お父さん、お母さんが決めることだから預かることになったら、僕にできることはさせてもらうよ」と伝えるようになりました。

この姉が昔から、そして今も親のように、ときには同じ歳の兄弟のように里子ちゃんたちの面倒を見てくれています。私だけ心配していたその里子ちゃんも今、家の中を明るく元気に照らしてくれるかけがえのない存在です。

児童相談所の皆さんには、私は直接関わることはほとんどありませんが、里子ちゃんのことで何度も家に来てくださったり、電話でいろんな相談事をしてくださったりと、両親も里子ちゃんたちも、どれだけ助けていただいたか分かりません。優しく、真剣に里子ちゃんたちのことを一番に考えて支えてくださり、本当にありがとうございます。

母の話でも、知人に里親活動をされている方がいると話していましたが、そのお子さん方と私も仲よくさせていただいています。ある里親活動されている家庭の、現在大学院生の息子さんと仲がよいんですが、食事をしているとき、これからどこで働きたいのと聞いたときに、その子は「僕は親が里親活動をしてきてくれて、たくさ

んの子供たちと暮らしてきたし、その子たちの助けに少しでもなりたいから兎相で働きたいと思って頑張っている」と話をしてくれました。本当にすばらしいなと思いましたし、全力で応援させてもらっています。大切な家族が増えるわけですし、子供の頃、両親が里親活動を始めるといったとき、また一緒に生活していく中で、不安を感じたとき、心配事はたくさんありましたし、今でもたまにあります。しかし今、私たち兄弟の中で、里子ちゃんたちを受け入れなかったほうがよかったと思う人は一人もいません。

親の大変な姿、兄弟の向き合い方から苦労や喜びを見てきた私ですが、現在結婚し、妻と娘と一緒に実家に暮らしています。里子ちゃんたちは娘をとてまかわいがってくれますし、小さな娘の存在で、里子ちゃんたちもお兄さん、お姉さんに成長してくれているのを見ている今が本当に幸せです。そして、妻と私たちもこれから里親活動をさせてもらいたいねと話をするようになりました。

最近、よっぱらって父に、「僕にどういう人間になってほしい」と聞いたことがありました。父は「人の幸せを願い、共に喜び合える人になってもらいたい」と一言話してくれました。きっと母もそうなんだろうと思います。

両親の里親活動を通して、私自身本当に人間的に成長させてもらっていると実感しています。これからも困難も乗り越えて、家族みんなで楽しく助け合っていきたいと思います。

どうもありがとうございました。

4 「うちにきた天使」

発表者：里親（50代）

家族構成：里親、委託児童（8歳男の子Sちゃん）

里親歴：7年

皆さん、こんにちは。現在、重度知的障害を持つ、お話ができない8歳の男の子を受託して5年目になります。

私は結婚も遅くて、子供が欲しかったのですが、なかなかできず。痛くてつらい不妊治療で体外受精も行いましたが、それでも授からず、自身の子供を持つことは諦めました。このとき、子供を授かるということは本当に奇跡なんだと痛感しました。

結婚したときに仲人をしてくれた友人が特別養子縁組で、すてきなご家庭を築かれていて、勧めてくれたことと、あと私の実の父が親戚間の養子であったことをきっかけに、産めなくても育てることができるのではないかと養子縁組を考えるようになりました。夫婦で研修を受け、養子縁組里親に登録して3年くらいご縁を待ちましたがなかなか決まらず。主人が50歳になった時点で、研修を受け直し、2019年に養育家庭里親へ登録をいたしました。

それからすぐに小3と小4の男の子を一時保護でお預かりしました。今から思えば、短期間でしたが、家に来た子たちはこれから自分の人生がどうなるのか分からないという、漠然とした大きな不安の中、とてもよく頑張っていたのだと思います。不安を少しでも軽くできるよう、夫とともにたくさんお出かけをして好きなことに夢中になれる時間になるべく持てるようにしました。

それからすぐうれしいことに、登録から1年たたずに、3歳の障害のある男の子の長期委託のお話がありました。夫婦で介護福祉士であること、乳児院で研修したときに出会った気管切開の女の子が、とてもかわいかったこともあり、障害の有無を問わないで受託したいということは、初めに、児童相談所のほうにお伝えしていました。

乳児院の面会で初めて、笑顔いっぱいの3歳のSちゃんに会うことができました。障害があっても受け入れたいと希望はしていたものの、いざ交流が始まると不安もありましたが、Sちゃんは真っ先に主人に抱きつき、それを見て、とても私もうれしくて、ああ、この子はうちに来る子だなと確信することができました。

一緒に外出の日、職員さんと支度をして、ドアからちょこっと顔を出して、廊下の奥から私たちが来るのを待っていてくれたときには、あまりにもかわいくて天使かと思いました。コロナ禍でもあり、半年以上の楽しい交流を重ね、翌年1月に正式に委託となりました。

交流の際、一つ印象に残っているのは、お部屋で5人くらいのテーブルを囲んで子供たちがご飯を食べているときに、いつもSちゃんはいらいらしていて、スプーンをポーンと遠くへ投げたりとか、乳児院の職員さんの気を引こうとして行動で訴えていました。一生懸命食べているんだから手伝ってほしい。褒めてほしい。自分だけを見ていてほしいと、話せない分、全身で訴えているのが、ドア越しに見ていて分かりました。家に来てからは、たくさん向き合おう、たくさん褒めよう、なるべく駄目とは言わないようにしようと、そのとき心に誓いました。

家に来てからは2対1で向き合える分、徐々に食事中のスプーン

を投げることもなくなっていました。これは、里親あるあるだそうなんですけれども、夜一緒に隣で寝ているとき、寝返りでSちゃんの目が開くときに私と目が合うことがあって、それにとっても驚いていました。施設の職員さんは一緒に朝まで隣で寝てくれるということはないからか、とてもびっくりされて、私もびっくりしました。

あとは、食事が出来上がるまではとても時間がかかるんだということが分からないので、私が料理している間も、遊んでもらえると思って近づいてきたりしてしまいます。Sちゃんと一緒にいるときは、料理をすることはちょっと諦めまして、ファミレスに行ったり、お総菜もたくさん活用しました。さらに大人が風邪を引いて寝込むということが分からないので、私が熱で起きられないで、寝ているところに何度も元気よくダイブしてきたりしていました。

うちは自営なので、そんなときは決まってパパがSちゃんを外に遊びに連れ出してくれましたが、パパが忙しいときは家事援助のサービスを使ったり、派遣型の一時保育事業を利用したりして、切り抜けました。

うちに来てからすぐは保育園を探すこと、療育に通わせることや、病院受診など慣れないことばかりで戸惑いました。幼稚園で、多動で障害のあるSちゃんをうちでは見られないと言われたときには、悲しくて泣いてしまったり、小学校に入るまでに何とか少しでも発語できるように、自立できるようにと、ママ友からよい療育があると聞くと、受けさせてみたりと、できることは全てしてあげたいと、当時必死で、私もちょっと情緒が不安定だったと思います。

その頃、本当にたくさん児童相談所やフォスターリングの方々に助

けていただきましたし、養育についてたくさん教えていただきました。

Sちゃんはお昼寝のときに、だっこするようにしていたんですけれども、そのうちに、試し行動なのか、私の前髪を引っ張るようになりまして、とても痛く、髪が抜けるんじゃないかと思うぐらいで、嫌なことがあるとテーブルや私をたたくようになりました。療育の先生に相談すると、きちっと叱ったほうがよいとのアドバイスを受けて叱ってはみたんですけども、全く逆効果で、Sちゃんをだっこしながら二人で泣いてしまったこともありました。好ましくない行動をやめさせるときには、無視をするという子育てのスキルを教わって、実践したところ効果がありまして、徐々にたたいたり引っ張ったりということはなくなっていました。

また、夜中に目が覚めてしまったり、朝早くに目が覚めてしまうことが多くて、私ももう体力がもたないので、Sちゃんと同じ時間に寝て、同じ時間に起きるように合わせていきました。

小学校に入ってから、てんかんの発作が起きまして、お薬を飲むようになり、それから夜中は落ち着いて眠れるようになりました。あと、うまく歩くことができない子でしたので、何回も転んで出血して救急で病院に行くこともありました。

大変なことは挙げれば切りがないですけれども、うれしいこともたくさんありました。来てすぐの頃に、おやつにスイカを出したとき、主人が昔の志村けんのまねをしてスイカにかじりついて、うわーってすごく早く食べたところ、Sちゃんもとても喜んで、自分もまねをしながら、3人でたくさん笑い合ったのを動画に残してあり

ます。それを何回も見返して、家族で笑い合えるということは私にとって最高に幸せな時間なんだなということを実感しました。

初めてママと言ってくれたときは本当にうれしくて、さらに寝言でママって言ってくれたこともあり、横で寝ながら私も泣いてしまいました。ちなみにパパって言えたのはそれから1年半後でした(笑)。

ジュースが飲みたいときには「ジュ、ジュ」というふうに一生懸命教えてくれます。教えてくれるのがうれしくて、つい言われたものを買ってしまいます。電車や自転車、ブーブーも大好きなんですけれど、ほかにもたくさん、最近では言えるようになりました。

トイレのほうはまだ自立はしていないんですが、最近便が出ると、「出た、出た」と教えてくれます。ご飯も美味しいと私のまねをして、「うま！」と言えたり、私がおならをすると、「ぷー」と言って一緒に笑い合ったり、少しずつですが発語も出てきています。

それから口で息を吸う、吐くということがちょっと苦手なのか、ストローがうまく使えなかったり、お誕生日のケーキのろうそくが消せなかったりしていたんですけども、最近はそのも上手に吸ったり、消せたりするようになっていきます。話せない分ジェスチャーもとても上手で、「学校、学校」とか、「大きい」とか、「トイレ、トイレ」とか。「自分、自分」って言ったり、「おしまい」とか手話とかマカトンサインって言うんですけども、教わるとすぐに身につけて自分でも使っているいろいろな教えてくれます。

大好きなファミレスに行きたいときは、私の携帯から写真を出しまして、指差しながら、こちらが「分かった、行くよ」と言うまで何度も何度も見せてきます。伝えたいことだけをシンプルに伝えて

くれるSちゃんに学ぶこともたくさんあります。Sちゃんと暮らしていると、生きるのに話すということ、話せるということはあんまり重要ではないのかなとも思えてきます。私も話すことが苦手ですぐに緊張してしまいますが、言葉足らずでも一生懸命伝えれば相手に気持ちは届くのかなというふうに、今は思っています。

よくお出かけもするのですが、子供と行くと動物園や遊園地がこんなに楽しいものなのかと自分も若返ったような気持ちになります。ずっと家にいるのではなく、たまにはお出かけしたほうが人生の幸福度は増すというふうに思います。Sちゃんは特に海が大好きなので、毎年夏は海にたくさん行きます。今年も新島へ行ってきたんですけれども、ボディボードをやったり里親仲間の皆さんと泊まりのキャンプに行ったりしています。

うちに来て5年近く経ちましたが、Sちゃんは今小学校3年生。楽しく特別支援学校に通っています。学校でたくさんのことを学び、知らない間に着替えができるようになっていたり、靴が履けるようになっていたり、朝ご飯を作っている間に学校の支度ができていたりと驚かされることもあります。

少しでも集中する時間が長くなればいいなど、学校と同じような机と椅子を購入しました。焦らずとも、Sちゃんのペースでゆっくり成長していくのだということが分かり、私の気持ちも今は大分落ち着いてきています。Sちゃんが作成した作品は、玄関や廊下に飾っています。高い絵を飾るよりもよっぽど元気が出ます。

特別支援学校で出会ったママ友さんたちは、障害のある子を産んでしまったと自分を責める時期を乗り越えて、とても明るくたくま

しく子育てをしていらっしゃると思います。私は産んでいない分、自責の苦しみがなく子育てができているのかなと思いますし、同時にママ友をとっても尊敬しています。

先輩の里親や、里親仲間の方々とも里親会やイベントで交流があります。通ってくる道は大体同じだからと悩みを聞いたり、愚痴を言い合えたり、ときにはレスパイトで助けてもらったりと、かけがえのないつながりです。これから将来のことなど不安なことは尽きませんが、チーム養育の皆さんや、同じ障害を持つ子を育てるママ友や里親仲間の皆さんに助けていただきながら、きっと笑顔いっぱいの生活が送れると思っています。

この文章を書きながら5年間を振り返ることができ、改めてこの機会を与えてくださったこと、Sちゃんと私たち家族に関わってくださっている方々に、感謝の思いでいっぱいです。聞いてくださって、ありがとうございました。

これから養育される方は大変なこともあると思いますが、どんな手を使ってでも自分を大切に癒やしながら、2年間は耐えていただいて、そこからふっと養育は楽になっていくと思います。それと、もし少しぐらいの障害のある子なら育ててもいいかなと思ってくださった方が一人でもいらしたら幸いです。

ぜひ、お仲間になってください。ありがとうございました。

5 「人生を一変させた私たちのダイブ ～にぎやかでありふれた冒険のはじまり～」

発表者：里親（60代）

家族構成：里親、委託児童（8歳男の子K君）

里親歴：7年

私は、8歳の男の子を妻と共に育てている里親です。この男の子のことをK君と呼ぶこととします。K君は2歳のときに我が家へ委託され、現在まで5年間、一緒に過ごしてきました。

K君は「おとうさん遊ぼう！」「おとうさん見て見て！」「おとうさん、だっこ～」と、一緒に家にいるときは、まとわりつくように過ごしています。夜中には私の布団に潜り込めます。こんなに頼られる日々がいつまで続くのかなあ。そろそろ友だちの方が大事になってくるのかなあ。などと気をもんでいるこの頃です。

K君は、私と妻の親戚の中にも溶け込んでいます。妻の実家へ行くと、おじいちゃん、おばあちゃんにいつもかわいがられています。私の姉の孫がK君と同世代なので、近所で一緒に食事をしたり、遊んだりしています。お彼岸には、私の両親の墓参りに一緒に行って、お墓に手を合わせてくれます。

K君にはたくさんの経験をさせてあげたいと、春休み、夏休み、冬休み、ゴールデンウィークなどの長い休みには、海や山や高原へと繰り出し、海水浴やスキーやキャンプの体験をさせたり、週末にもできる限り、あちらこちらへ出かけています。新しい経験をするたびに、K君が喜んだり驚いたりするのを見るのがとても楽しいで

す。K君よりも、むしろ私のほうが楽しんでいるのかもしれませんが。

私にとって、このように楽しく貴重な経験をさせてもらっているのは、里親という制度がなければ経験することがなかった日常生活なので、この制度にとっても感謝しています。

ということで、里親ということを考えていらっしゃる皆様に、私がどのようにして、こんなに活気のある楽しい毎日にたどり着けたのかお話しさせていただきたいと思います。

私たち夫婦の結婚は比較的遅く、共に40代でした。子どもを授かりたいということで不妊治療を始めましたが、結果うまくいかず、妻もつらそうでしたので、話し合って諦めることにしました。

その際に、養子縁組について調べてみましたが、当時、東京都では夫婦どちらかでも50歳以上だと、養子縁組はできないことになっていました。このとき、私はもう50を過ぎていたため、一旦諦めることとしました。

何年か経って、ある新聞記事に目が留まりました。それは、イラン出身の女性タレント、サヘル・ローズさんの里子として育てられた体験などが語られていた里親に関する特集記事で、紙面には、50代以上で里子を育てている体験記事などがちりばめられていました。そこで改めて養子縁組を調べてみると、50歳という壁がこの数年間のうちに撤廃されているのを知りました。

早速、都内で開催されている体験発表会へ何回か足を運び、終了後の面談などで様々な知識を得ることができました。その後、児童相談所へ出向き、詳細に説明していただき、里親という制度を理解したうえで、里親認定研修に申し込むこととしました。

里親認定の研修では、テキストに基づく座学後、児童養護施設と乳児院へ訪問して、体験実習などを行いました。

研修を終え、里親の認定を得ることができました。申し込んでから認定までは、大体4か月程度の期間でした。

認定から約8か月が経ち、ようやく紹介したい子どもがいるとの連絡が入りました。

それが今、我が家で一緒に過ごしているK君です。私たちはもちろん快諾して、K君との面会の日々が始まりました。

初めて会った日のことは忘れられません。乳児院で過ごすK君の一人遊びに寄り添い、話しかけたり、一緒に遊ぼうとしましたが、なかなか心を開いてくれませんでした。

交流を進めるにつれ、お互いに少しずつ慣れていきました。

面会を始めて1か月ほど経って、2泊3日で我が家にお泊まりに来ました。私たちにも増して、K君は緊張していたようです。当時の写真を見ると、今では考えられないくらい引き締まったしっかりした顔をしています。用意したハンバーグのごはんも今とは違い、正しい姿勢で残さずにしっかり食べきりました。まだ3歳にも満たない子が、ひとりで、こんなにも緊張してがんばっている姿は、本当にいたいけで、いとおしく感じました。

その後、すぐに長期のお泊まり。そしてそのまま委託されることになりました。本来ならもう少し期間を設けるらしいのですが、当時はコロナ禍で、例外的に日程をぎゅっと詰め込んだそうです。

委託された後も、しばらくは、噛みつき、ひっかき、物を投げる、障子を破る、物を壊すといった行動がありました。これがいわゆる

試し行動だったのかもしれませんが。

私たちの日常はK君を中心に回るようになり、生活は激変しました。大変な日々ではありましたが、新しいチャレンジができたことを楽しめた毎日でもありました。

そして、保育園から幼稚園、小学校へと進み、現在に至ります。

今ではどこにでもいる親子、家族、家庭のひとつとして、生活を送っています。

ただし、どこにでもある家族とは異なる点があります。

それは私たちに、K君が委託されるまでの3年近い間の子育て経験がないこと、実の親が存在すること、今使用している名字が本名とは異なること、さらに言えば、親としての年齢が高すぎることに、そして委託解除の日がいつかは来るということです。

里親としてしなければならない大きな仕事のひとつが『真実告知』です。幼稚園の頃から折に触れ、K君に委託前の写真や実母の写真を見せながら、この家に来ることになった経緯や、実母がいるという話をし、K君からの質問に答えるなどしています。

K君には3人の母と言える存在があります。実母Aさん、乳児院時代の担当職員のLさん、そして私の妻です。3人とも、K君を今でも愛していることを伝えています。

3人目の母と言うべき存在の私の妻に対しては、K君は私に対してと同様に、日によって大好きになったり、大嫌いになったりしています。でも、信頼関係は築かれているようで、いつもべったりと甘えています。

K君にもうひとつの名字があることも伝えています。名字が2つ

あることを友だちに自慢しようとしたこともありましたが、「もうひとつの名字は、K君にとって大事なものだから、心の中にしまっておこうね。」と言うと、何かを察したのか、べらべらと話すことはしていないようです。

真実告知については、家庭でのほかに、児童相談所へ定期的に訪問して、心理司の方が分かりやすく生い立ちを整理して、K君に説明してくれました。今後も折に触れ、K君には話していきます。成長段階で、年齢により受け止め方も変わってくるでしょうし、疑問も出てくるでしょうが、K君の人生を肯定的に語っていきたいと思っています。

K君が卒業した保育園・幼稚園や、今の小学校の先生方も、とても理解があり、応援していただいていることに感謝しています。

里子を迎え入れたことで変わったことは、まだまだあります。

そのひとつは、地域社会との交流です。地域のイベントやお祭りなどに積極的に参加することで、地域社会との交流も深まっています。近くの公園へ行けば、K君の友だちやパパ友、ママ友に出会うこともしばしばです。

児童相談所やフォスタリングという、里親と子どもを支援してくださる機関の方々との交流も生まれました。この養育は、私たち夫婦だけで担っているものではありません。『社会的養育』として、児童相談所やフォスタリング機関など、多くの方々に支えられています。困ったときの相談先、頼るところがたくさんある制度です。

フォスタリング機関や養育家庭の会を通じて、子どもや育て方についての様々な研修を受ける機会にも恵まれています。興味ある研

修には積極的に参加しています。真実告知、中途養育、発達障害、子どもの権利、スマホ・ゲーム依存、絵本についてなど、テーマは様々です。このような様々な知識を得ることは、私の興味にも合致していますが、子どもについて客観的に学習できる環境が身近にあることにも感謝しています。

私自身についても、こうした経験を通じてますます興味が沸いてしまい、全くの異業種から、児童に関わる職業へ転職するに至りました。

これらを含め、私の人生は一変しました。同世代の友だちからは、周回遅れの子育てをしていることにはなりますが、私にとってはちょうどいい時期だったのかもしれませんが。毎日が充実していて、老け込む余裕がないこと、精神的に生きる糧を得たことに、K君とK君を受け入れることができたこの制度に巡り会えてよかったと思っています。

それでも、いつかK君は巣立っていきます。

委託期間は例外を除き、最長で18歳までです。でも、もし措置解除後も途切れない関係が続けることができていたら、成人後のK君と一緒にお酒を飲みたい。などと空想することがあります。

今もK君は、夜中に目覚めて「怖いからぎゅうして。」とすることがあります。このくらいの年齢なら、よくあることかもしれませんが、もしかすると彼らの独特の境遇から、漠然とした不安、得体の知れない恐怖を感じているのかもしれない。と思うと切ない気持ちになり、ぎゅっとしてやり、頭や背中をなでてあげたりします。すると安心したように、すぐにスヤスヤと眠りに就きます。

この子を守り続けるためにも、将来、この子と一緒にお酒を飲むという夢をかなえるためにも、健康で長生きしてやるぞ。というのが今の私のモチベーションになっています。

ここまで、いろいろとお話しさせていただきました。

が、正直なところは、里親になるために積極的に動いてくれたのは私の妻でした。私はそこにぶら下がって、引きずられて、付いていただけ・・・というのが実際のところですよ。このように人生を変えるような経験をするきっかけをつくってくれた妻には、本当にありがたく思っています。

養育家庭を構築するためには、夫婦間の協力が不可欠ですが、多少の熱量の違いがあっても、同じ方向を向くことさえできていれば、様々な問題を乗り越えていけるのではないかと思います。

この先も、K君に反抗期が訪れたり、様々な困難や、もしかすると社会との摩擦などが待ち受けているかもしれません。でも、K君の未来が、そんなことには負けない、自立した明るく楽しい日々となるよう、K君が巣立っていくその日まで、覚悟を持って、愛情を注いで育てていきたいと考えています。

今日、お話しした内容は、里親というカタチのほんの一例にすぎません。

ただ、ほんの少しでも皆様の参考になり、里親に対する理解を少しでも深めていただければと思い、お話しさせていただきました。

6 「“親” からもらった愛情が力になる」

発表者：元委託児（自立）

家族構成：里親、委託児童（複数人）

私は年長（5歳）の時に児童養護施設から里親の家に来ました。

20歳の誕生日に里親宅から自立し、今は一人暮らしをしています。

委託前の里親との交流のときには「この人（里親）の家で暮らす」とは思っていませんでした。児童養護施設では“自分だけが構ってもらえる時間”がありませんでしたが、里親の家に行くとみんなが自分と遊んでくれて、自分だけを見ていてくれて、好きな塗り絵を一緒にしてもらえました。「内緒だよ」と言ってスーパーでお菓子を買ってもらえたのも特別な感じがしてとても嬉しかったです。実際に里親宅での生活が始まり、好きなご飯を作ってもらえる経験はとても良かったです。里母が「今日は何が食べたい？」と聞いてきて答えたものが夕ご飯に出てくるという体験は施設ではありませんでした。里母のご飯がおいしくて大好きでした。

小さい頃から実親の写真は見ていたので、自分の境遇についてはなんとなくわかっていましたが、ちゃんと認識したのは小学2年生くらいの時でした。本を読むことが好きで色々な本を読む中で「私の境遇ってこの本と一緒になんだな」と認識しました。小学5年生くらいになると「なんで私はお母さんと一緒に暮らせないんだろう」という思いから、よく泣いていました。お母さんに会いたい気持ちはずっとありました。里親宅には短期で預かる子もたくさん来ていましたが、みんな実親のもとに帰っていくので私もいつか帰れると

いう期待があったと思います。あまり自分の気持ちを里親や里親宅の家族には話していませんでしたが、思春期の時に1か月くらい誰とも話をしない時期があり、心配した里親が家族会議を開きました。そのときはさらっと自分の気持ちを伝えましたが、その家族会議すらいやだったので「この時間早く終われ！」と思っていました。

放課後に通っていたひろばの先生が相談相手でした。私がひろばにいないことに気付いて泣いている私を探しに来てくれました。話を聞いてくれたり、黙って一緒にいてくれました。この時は里親宅よりもひろばが一番の居場所になっていました。小学校を卒業した後も何かあるとその先生に相談しに行っていましたし、今でもSNSで繋がっています。当時から私の周りにはいい人がいっぱいいたなと思っています。小学校6年生くらいまではこういう葛藤が続いていました。その頃からもっといろいろな本を読み始め、中学校に入る前に将来のことを考えるようになったとき、「泣いていてもしょうがない」と思うようになりました。

中学2年生くらいのときに18歳で里親宅を出ないといけないと知り、「お金も無いし、どうしよう」という不安な気持ちが出てきました。もし里親に「18歳で出て行かないといけないんだよ」と言われたら、傷つくと思い怖くて聞けませんでした。手に職を付けたほうが良いと思い、高校は調理師免許が取れる学校に進学しました。卒業後はもともと興味があった美容の専門学校に行くことになりましたが、体調面や金銭面を心配した里母が「里親宅から通った方がいいんじゃない？」と声をかけてくれました。この時に初めて「私はまだこの家にいていいんだ」と思えました。高校2年か3年

のときに一人暮らしに必要なお金や授業料を計算し、「一人暮らしは無理かもしれない」と思っていました。自分から里親には言えなかったのも里母に言ってもらえてすごく安心しました。今振り返っても、高校卒業と同時に里親宅から自立するのは、やはり金銭面でもメンタル面でも大変だったと思うので、里親宅から専門学校に通えてよかったと思います。

私が里親宅に委託された後にも何人か子どもが委託されました。最初は私が中学2年生くらいのときに4歳の男の子Aくんが委託されました。その時の気持ちは正直に言うといやでした。今までずっと私に向いていた里親の関心がその子に取られると思いました。私が里親宅に来たときは私が一番だったのに、その座を取られてしまうのは、もう中学生になっていましたがいやだなと思っていました。でも、Aくんと関わる里母の幸せそうな顔を見たら、それが一番嬉しかったし良かったなと思いました。里母がAくんの対応に集中していると、里父がこっそりお小遣いをくれたり私のことを気にかけてくれているのが伝わり嬉しかったです。

次にBくんが委託された時は突然で、学校から家に帰ったら知らない子が来ているという状態でした。事前に言ってくれなかった寂しさと、「敵が一人増えた」という気持ちがあったと思います。私はもう高校生でしたが、もっと小さい年齢だったら衝撃は大きかったと思います。私は先に委託されていたAくんのことが心配になりました。里母がBくんに手をかけているとAくんは「ぼくにもかまって」という顔をしていました。里父がこっそり私にしてくれていたことを今度は私がAくんにしてあげようと思いました。そのあと

にCちゃんが里親宅に来た時もそうでした。

私が自立する前、里親宅で生活していた時は私を含め4人の子どもがいましたが、私が自立した後にもまた新しくDちゃんが委託されました。私は里親宅から自立し一人暮らしをしていましたが、Cちゃんがヤキモチを妬き寂しい思いをしていたのを知っていたので、里親宅に行った際にはCちゃんをかわいい髪形にしてあげたり、抱っこしてあげたり、「Cちゃんが一番大好きだよ」とハグしていました。

今年、5歳で里親宅に来てから初めて、里親宅に来る前に住んでいた児童養護施設を訪ねました。毎年年賀状を送ってもらっていたので気にはなっていましたし、遊びに行きたい気持ちはありましたが行けませんでした。ずっと「なんでお母さんと暮らせないんだろう」という思いがありましたし、自分がなんで里親宅にいるのかもわかりませんでしたし、里親に「施設に行きたい」と言ったらどう思うかな、私がそう言ったら里親が傷付くんじゃないかなという不安もありました。自分の境遇を認めるのが嫌だったという気持ちもあったと思います。施設の職員に会いたい気持ちはありましたが、会うなら立派になった自分で会いたいという気持ちもありました。

私は里親宅で育ったことが私にとっては一番よかったと思っていますし、今の自分にとって自慢できることだと思っています。実親に対しては、いろいろな事情があったのは理解できるし、あのまま実親と一緒に暮らしていてもいずれは私が家を出ていたと思いますが、自分で産むてきめたなら責任を持って！とも思います。でも、私は里親宅で生活できたことが本当に良かったと思うし、今でも自

分が本当に困ったときに助けてくれる人、里親がいるっていうのはとても大きいです。大人になった今だから里親宅に行ったのも自分のためだったんだと半分くらいは理解できています。こうやって理解するにはすごく時間がかかりましたし、受け入れるのに時間がかかる人もいるのかなと思います。大人になって「親からもらう愛情が力になるんだ」と知りました。だから、今うまくいかないことがあっても怖くありません。心配かけたくないって思うから頑張れると思いますし、悪いことはしちゃいけないって思います。うれしいことは一番最初に報告したいって思いますし、報告したい人がいるってすごくいいなと思います。里親に対しては常に感謝の気持ちしかありません。思春期には里親と喧嘩をすることもあり、心の中で「くそばばあ」と思うことはありましたが、その言葉に里親がどれだけ傷付くか想像できたので、口にしたことは一度もありません。一度言った言葉は消せないから。

もう一つ、私は自分の名前をととても気に入っています。昔は里親と同じ名前になりたいと思い、テストに里親の苗字と自分の名前を記載したことがありました。でも今は名前まで変えてしまったら実親との繋がりがなくなっちゃうと思うし、産んでくれたことにはすごく感謝しているから名前だけでも繋がっていたいと思っています。

家族の愛、母親の愛情ってすごく大事だと思っています。社会人になって苦労した時に、自分に帰る場所があって、どんな時でも自分の味方でいてくれて、助けてくれる存在がいるって、それだけで自分らしく生きていく力になると思います。一人でも多くの子どもが里親家庭という家族の中で暮らせると嬉しいなと思います。

7 「共に生きる」

発表者：里親（50代）

家族構成：里親、委託児童（14歳男の子）

里親歴：4年

【ファシリテーター】

どのようなきっかけで里親になろうと思ったのですか。

【里親】

東北の地震があったときに、ボランティアで2年ばかりお手伝いに行かせていただいて、地元でも何かお手伝いできないかなということで、保護犬を飼ってきました。保護犬も5匹ほどいるのですが、落ち着いてきましたから、誰かをお手伝いできないかなと思い、里親に登録をさせていただきました。

【ファシリテーター】

初めてお子さんがおうちに来るまでと、預かったときのお気持ちを教えてください。

【里親】

最初は一時保護で2週間ぐらいでした。初めての環境ですから、とにかくリラックスしてもらうように心がけていました。朝起きてご飯を食べて、それだけをただひたすら繰り返す、日常を経験してもらうことですね。

準備したものは特になくて、差し当たり服を買うだとか、そういうこともありましたけれども、児童相談所のほうからバックアップもありましたから、日常生活に新しい子がぽんとうってくるような、

そんな感じでしたね。特に慌てることもなく、淡々と受け入れていました。

あくまでも日常を提供する、普通に朝起きてご飯を食べると、それだけをひたすらしてもらうというのを念頭に置いていましたから、特にどうこうするというか、むしろ子供が来て、私も一緒に遊ばせていただくというか、そんな気持ちでいます。

【ファシリテーター】

小学生や高校生のお子さんも預かっていただいていたいて、年齢によって関わり方など何か意識していることはありますか。

【里親】

私のところに来るお子さんは、ある程度自分の身の回りのことはできますから、あなたが今までやってきたことをそのままうちでやってくればそれでいいよということは言っています。特には難しいことも言いませんし、ルールは背中で見せるというか、そうするとまねしてくれますので、それでいいよという感じですね。特に押しつけず、あくまで自主性に任せるということを重んじています。

【ファシリテーター】

フォスタリングや児童相談所の職員との関わりはどうでしょうか。

【里親】

新しい里子さんを迎えたときに、全部私が引き受けるんじゃないくて、あくまでも児童相談所と私とそのお子さんとで三角の関係だと思っています。何かあったら逐一児童相談所さんと相談をしながら進めていくということを大事にしています。

親担当の職員さんや子供が専門の職員さんがいて、心理士さんや

生活の面倒を見る方もいらっしゃるので、児童相談所といっても1人のお子さんに対して20人ぐらいいるんじゃないかと思っています。かなりの人数が1人のお子さんの命を守っていると感じます。

【ファシリテーター】

先ほど一番初めてが一時保護のお子さんだとお話があったのですが、一時保護はどのように依頼が来ましたか。

【里親】

急に話が来るんですよね、緊急で。お子さんが大変だから、少し預かってくれという話が電話できまして、私のほうも困っているならうち来ていいですよと答えました。大体そのとき、3週間ぐらいゆっくりしてきましたかね。別の受入先が決まったということで、突然さよならしたときは、つらかったですね。

最初に準備したのは、一時保護でも長期の子でも、衣食住の衣服だけですかね。児童相談所のバックアップがありますから、こちらのほうで出費するということはありません。あとはもう普通の生活になっていくだけでしょうか。

【ファシリテーター】

急に保護するとなりますと、取りあえず着の身着のままで行くんです。後日、児童相談所が親御さんとお話をして、衣類を持っている場合もあるんですが、難しい場合は、里親のご家庭で準備していただきますが、費用が出ます。

一時保護の子供たちはいきなり知らないご家庭に行くので緊張していると思います。その辺りはいかがでしょう。

【里親】

特に構えていませんので、仲間というか、1人誰か小さい子が来るという感じですから、リラックスしてくれればと思っています。こちらが多分緊張すると向こうにも緊張が伝わると思うんで。ゆっくりしていったらという、仮の宿を提供するような感じでやっていますので、こちらの受け入れる心持ち次第だと思っています。

【ファシリテーター】

短い期間での別れが必ずありますので、長期と違ってどういうふうな心構えをされているのか教えてください。

【里親】

いかに命を引き継ぐか、私はそれが大事だと思っています。このもらった命を、どうやって次にバトンタッチできるか、あくまで私は中継ぎというか、先発完投はしないというか、誰かにお渡しする中継点なので、そんなことは意識をしています。

とにかく新しいことがいろいろ起きますので、そのたびに自分も更新できるように心がけていますね。今までどおりでもいいんですけど、何かあったときにその都度その都度自分もアップデートしていくというのは大事ななと思っています。

【ファシリテーター】

ある程度大きいお子さんを自立するまで預かることの中で、難しかったことやよかったことを教えてください。

【里親】

難しいとは特に私は感じてないです。とにかくゆっくりしてしてもらおうというのは念頭にあるので、私のほうでしつけをするだと

か、そういうことはありませんし、高校生の場合は卒業して大学に入学するときも、奨学金などのサポートが結構充実しているので、進学に関しても大丈夫かなと思っています。

【ファシリテーター】

自立する上で大切なことを教えていただけたらと思います。

【里親】

うちから旅立つときには、背筋を伸ばしなさいとか、きちんと挨拶をしなさいと言うように伝えています。もう一つは、お金の面に関してです。今21になった里子がいるんですが、社会人になったときにお金を随分と使い込んでしまいました。高校生までは小遣いに1万円ももらってないような子が、いきなり社会人になって何十万ももらうと、うれしくてきっと全部使っちゃったんだと思うんですが、そのときはお灸を据えました。お金の使い方について、貯蓄と使える分とちゃんと割り振りして使っていこうねと言ったことがありましたね。

【ファシリテーター】

家庭でいろんなことを伝えていくことはとても大切だと思うんですが、そのためには、里母さんと里父さんの役割分担など、協力体制が必要かなと思っています。

【里親】

高校生を預かった場合はある程度自分で身の回りのことができますから特に私も言うことはなかったんですが、今いる中学2年生の男の子には、暖房や電気の消し忘れとかで、私か妻がこれはやっちゃいけないよと言う瞬間があります。夫婦そろってその子を追い詰

めちゃうと、多分いっぱいいっぱいになっちゃうので、どちらか片方が叱って、片方が逃げ道をつくる。例えば、私が叱るなら、奥さんが、緩衝材というか受け止めると。阿吽とはいいいませんが、逃げ道をどこかでつくってやるようにしているつもりです。

【ファシリテーター】

最後に振り返っていただいて、里親さんになってどうですか。

【里親】

言葉に語弊があるかもしれませんが、非常に楽しい体験をさせていただいています。つらいこともあるかもしれませんが、私も里親で役得だなというのが一つあって、卒業式に行くんですね。3人、卒業式と入学式にそれぞれ出席しましたが、あれは里親の特権というか、いい経験をさせてもらったなあと思います。

あと1か月もすれば卒業式シーズンになりますが、高校生も小学生も卒業式は歌を歌うんですね。あれはやってよかったなという瞬間であって、「変わらないもの」という歌を聞いたときに、とても心に残って、出会いというのはいいことだなと感じています。

私もたしか5年前は皆さんと同じ席にいました。今たまたまひな壇に座らせていただいて何か大それたことを言っていますけども、ふわっとした感じで、里親さんになっても、私でも通用しますので、多分皆さんもそういうちょっとした気持ちがあれば、気軽には言いませんけども比較的受入れ体制も非常にきちんとしていますので、1人でも多く里親さんが増えてくれれば私もうれしいなと思っています。

8 「A君と歩んだ日々」

発表者：里親（60代）

家族構成：里親、委託児童（18歳男児）、里親の父

里親歴：11年

みなさん、こんにちは。本日は私の体験を発表いたします。

我が家には子どもがいません。そうしたこともあり、養子を迎えることを考え、児童相談所に話を聞こうと出かけたところから始まります。

ところが、養子の斡旋は50歳までと制限があり、当時の私は60歳だったため叶わぬ夢となりました。しかし、窓口で養育家庭という制度があり、家庭環境の整わない子どもを預かり、育てることができるという話を聞きました。資料をいただき、夫婦でよく話し合い、登録を希望し、申込をおこないました。

当時、里親登録には座学による研修と施設における実習を行うことが義務付けられており、休みを調整して1つ1つ参加を重ねていきました。

登録後1年間は何もないままでしたが、ある時、児童相談所より連絡がありました。小学校の男の子とのお話でした。早速、日程を調整し、面会に向かいました。可愛らしい小学3年生の子どもさんでした。その後、交流期間中に、週末になると我が家に来て1日1泊と交流を重ね、約1年間を過ごしました。

いよいよ、我が家に決定かということで本人と私達夫婦、施設職員、児童相談所の担当職員との話合が持たれました。担当職員さん

は、小学生の彼に施設に残るか私達の家に行くのかを決めさせるために尋ねると、彼は我が家に行きたいと言ってくれました。また、その時思ったのは、小さい子どもにもきちんと話をして本人に決めさせるのだなと強く感じました。小さな子どもには大変なことだなと思いました。

そして彼（A君とします）がやってきました。忘れもしません。12月25日クリスマスの日でした。大きな黒いランドセルを背負い、施設の職員さんと共にやってきました。当時、我が家は私の両親と私夫婦の4人家庭でした。交流期間中にA君を連れていた私達を見ていた近所の人に事情を説明し、町会長さん、民生委員さんへの挨拶を行いました。

子どもを受け入れる準備も中々大変でした。私の職場の上司にも状況を報告したところ、上司の娘さんが児童養護施設に勤務していたことを知り、色々と休みを調整してくれて協力をしてくださいました。事情を抱えている子どもなので、転校する地元の小学校に事前に挨拶を行い、受入の準備を進めました。そのような中で当時私は仕事の都合で泊り勤務があり、妻は私がいなくて苦労を重ねたと思います。両親はというと、今まで静かな家の中で子どもの声がするのはとても良いことだと特に母が喜んでいました。

いよいよ、一緒での生活が始まりました。環境が変わった彼も大変だったと思います。私達も色々と大変でした。寝具を揃え、学習机のスペースを考え、1つ1つ整えていきました。

食生活も大変でした。後からわかったことですが、施設出身の子は、生ものが苦手です。食べつけていないのです。刺身やお寿司は苦手

のようでした。そうした中で「養育家庭の会」という組織があると知りました。里親が集まり、協力して養育していくものです。近所にいる里親の先輩が声をかけてくださいました。何か困ったことがあったらいつでも言ってくださいと力強い言葉をいただきました。希望もありますが、不安の大きい中での申出は、私達には大変頼もしく、ありがたいものでした。

そのような中で色々な会合に参加して、分からないこと、不安なことを話し、アドバイスをいただきました。私が留守のことが多いので、特に妻はメンバーの皆さんを頼りにしていただくと感じます。クリスマス会やイベントの集まりごとに、それぞれの子どもさんの様子を確認し、アドバイスをいただくことが支えとなっていました。

最初は、おとなしく過ごしていたA君も慣れてくるとやんちゃな一面をみせてきました。いたずらして叱られると家を飛び出し、近くの公園で我々が探しに来るのを待っているだとか、学校でクラスメイトに煽られて騒ぎ出し、先生から手に負えないので連れて帰ってほしいと連絡がきたりと、今思えば笑い話になっていますが、当時はなかなか厄介なことでした。

そうした中で、孤立しがちな我々を養育家庭の会の皆さんが支えてくれていました。会合で、困ったことがあると話すと、アドバイスがとてもありがたく、励みになりました。これは、アドバイスをさせていただいたことですが、他のメンバーの方の子どもさんが、JRのSUICAを作ることができずにいました。実子であれば手続きが簡単なことでも、里子となると色々と難しくなっています。

LINEでSUICAが作れず困っていた会員さんにうちの妻が必

要書類と作り方をアドバイスしてあげたこともあります。また、最近は個人情報保護の面から、銀行口座を作るのが難しくなっており、やり方をアドバイスしたこともありました。

生活していると、色々なことがあります。1つ1つそれぞれを先輩が助言してくれることで解決に向かうことができます。いちいち児相に確認しなくてもメンバーのLINEで困り事を発信するとベテランの会員さんがアドバイスしてくれます、力強い仲間があります。とても頼りがいのある仲間です。

今後も養育家庭の会の仲間、児相のみなさんと共に彼が自立するまで頑張っていきます。

本日はありがとうございました。

9 「里親家庭に生まれて」

発表者：実子（20代）

家族構成：里親、委託児童（複数）

こんにちは。今回は里親家庭の実子として育ちました私が経験したことについて、お話しさせていただきます。

まず初めに、私が育った環境についてご紹介いたします。

私の両親は、私と姉を育てながら里親を始め、その後ファミリーホームとなり、現在までの計29年間、養育家庭を続けています。受け入れた里子たちはおおよそ40名程度で、現在も一人が自立しては、また一人を受け入れ、そういった形を続けています。

そんな家庭で育った私が両親についてどのように感じているか一言で申し上げますと、とても尊敬しています。まず、里親という活動は、とても社会的意義のある活動だと思いますし、並大抵の覚悟ではできないことを長年続けている、そんな両親のことはとても誇りに思っています。

というふうに言うと、すごくうそくさく、本当なのというふうに感じられるかとは思いますが、当然最初からこのように感じていたわけではなく、この考えに至るまでには様々な経験がありました。

幼少期、私は物心のついた頃には実の両親と実の姉一人と、またたくさんの里子たちが家の中にいるような生活だったので、特に違和感はなく、毎日たくさんの兄弟たちと遊んだり、お母さんの膝の上を取り合ってけんかしたり、にぎやかで楽しい日々を過ごしていました。

しかし、それまでただただ楽しいだけだった生活に疑問が浮かび始めたのは、小学校低学年の頃でした。

小学校に入ると、夏休みなどの長期休暇が明けるたびに、休暇中はどこへ旅行に行ったかといったような会話が自然と出てくるようになりました。ふと、私の家は旅行に行っていないなということに気がつきました。家に帰った後、母に「どうしてうちは旅行に行かないの」と聞くと、「こんなに大人数がいて行けるわけじゃない」と笑われてしまいました。幼いながらも、そのとき理解はしていたので、うちはほかの家庭とは違うんだなと、普通の家の子たちは休みのたびに旅行に行けていいなくらいにしか思っていませんでした。

それから、里子や里親家庭に対する感情が大きく変わったのは、小学校高学年の頃でした。

その頃、我が家に新しく委託となった男の子K君がいました。K君は私と同年の男の子で、児童養護施設からうちに来た子でした。K君はうちに来たばかりの頃、以前いた施設と我が家を比較するようなことを言っていました。私は、自分の大好きな両親を否定されたような気持ちになり、次第にK君に対して苦手意識を抱くようになりました。また、K君とは同年で同じ小学校に通っていたため、K君と一緒に住んでいることを同級生からからかわれることもありました。小学校高学年で多感な時期だったので、だんだんとK君のことが嫌いになっていきました。

そんなある日、K君が実親さんと会う日がありました。当時うちに委託されていた子供たちの中では、K君の面会日はとても目立っていました。K君は実親さんとの面会から帰ってくるたびに、手に

たくさんのおもちゃやゲームを抱えて自慢していたからです。そのような出来事が何度もあり、次第に私の心の中にとある感情が芽生えてきました。それは、里子たちには、両親が二人ずついてずるい。私と実姉の親は世界に一人ずつしかいないのにという感情でした。もちろん様々な事情で実親さんと面会できない子供がいることも理解はしていましたが、親という絶対的な存在が生みの親と育ての親、それぞれ二人ずついる、そんな里子たちが羨ましくて仕方ありませんでした。それからは、ほかの里子たちも疎ましくなり、だんだんと里子や里親家庭に対して嫌悪感を抱くようになりました。

小学校高学年から中学生ぐらいまでは、里子たちとは距離を置きつつ、両親が続ける里親には、賛成も反対もしないというようなスタンスを保っていました。どちらかというとなら反対寄りだったかもしれません。

ところが高校生になると、学校やバイト先などで自分の家庭について話す機会も増え、自分の家庭について人に話すたびに、「ご両親はすごいね。普通の人にはなかなかできないすばらしいことだよ」と褒めてもらえることが多くなりました。そこで初めて両親の行っている里親を続けることはすごいことなのだと認識し始めました。

当時、我が家には幼稚園や小学生の小さな里子たちと、同年代の女子高生の里子がいました。その頃には、自分自身も成長してだんだんと里子たちへの嫌悪感が薄くなってきたこともあり、年の離れた小さな里子たちは弟や妹のように、同年代の子供たちとは友達、姉妹のように、家族として接することができるようになっていました。その中でも一つ年上の女の子とは特に仲がよくなり、友達より

も距離が近く、実の家族には話しづらいようなことも話せるという、とてもよい関係を築くことができました。

このように、自身の成長とともに、だんだんと里子たちや里親に対するマイナス感情はなくなっていました。その感情がプラスに好転したのは、その後のことでした。

両親が里親を始めて15年以上たち、この頃には我が家から自立して巣立った子たちが、時々顔を見せに帰ってくるということもよくありました。その中に、中学3年生の頃に我が家に委託となり、18歳までうちで育ち、自立した女の子Iちゃんがいました。

Iちゃんは、うちにいた頃はとてもおとなしくて、うちにいてもほかの子たちと話したりせず、私たち家族に対してあまり心を開いていなかったような印象がありました。ところがIちゃんは自立してうちを出た後、時々仕事の愚痴を言いにうちに帰ってきたり、近況報告をしに来てくれるようになりました。

そんなある日、Iちゃんから両親のもとへ結婚の報告がありました。さらにうれしいことに、里親である私の両親に、結婚相手の家族に親として挨拶をしてほしいと依頼をしに来てくれたのです。

我が家にいた頃、心を開くことが難しかった子とも、両親はしっかりと親子関係を築いており、その結果、親として頼ってもらえるような存在になっていたんだなと知り、一気に尊敬の感情が湧き出てきました。

また、その後Iちゃんは子供にも恵まれ、家庭を築いている姿を度々見せてくれました。家庭を求めてうちにやってきた子が、今は自らの手で家庭を築いていて、その手助けをしていた両親を、また

今も多くの子供たちに対してその手助けをしている両親のことを、とても誇りに思っています。

そして、このように両親のことを私が心から尊敬できたのは、両親が実子も里子も分け隔てなく愛情を与えて育ててくれたからだと思っています。もし、自分たち実子だけが優遇されたり特別扱いをされていたら、里子たちのことを家族とは思えていなかったと思います。また、両親のやってきたことのすごさにも、気づいていなかったと思います。

なので、里親をやっているからすごいとか、大勢の子供を育ててきたからすごいとかではなく、本当に1から、初めまして、こんにちはという状態から始まって、全く血のつながりのないところからでも本当の家族になれるんだということを目の前で証明してくれた両親を私は心から尊敬しています。

現在は私自身も自立し、里子たちと一緒に暮らしてはいませんが、今でも変わらずに連絡を取り合っている元里子などもありますし、今後も兄弟として里子や元里子たちと関わっていきたいと思っています。

以上となります。ご清聴いただきありがとうございました。

10「子どもって おもしろい」

発表者：里親（40代）

家族構成：里親、委託児童（Mちゃん18歳、D君16歳）

里親歴：17年

【里親】

私たち夫婦は2010年から当時3歳の女の子Mちゃんと、1歳の男の子D君きょうだいを迎えて暮らしてきました。今ではMちゃんは専門学校1年生、D君は高校2年生になっています。子供を授かれなかった私たちですが、20年ほど前、夫から「血のつながらない子を育ててみないか」と言われたことがきっかけで里親制度を知りました。

【ファシリテーター】

里親になる前も養育家庭体験発表会に参加されていたということですが、参加した後どのようなこととお話しされましたか。

【里親】

養育体験発表会には最初は母と一緒に参加しました。その翌年には主人と一緒に参加しました。母も主人もそれぞれ里親制度の説明を受けたことで少しいメージが湧いたようでした。

【ファシリテーター】

里親認定を受けた後は、すぐにお子さんはご紹介されたんですか。

【里親】

里親認定を受けて、しばらくして児童相談所からきょうだいを紹介されました。それがMちゃんとD君で、初めて会ったのは乳児院

です。Mちゃんは私たちをじっとみつめるだけで、特に夫のことを怖がっていて近づきませんでした。それでも私はこの子と気が合うかもしれないと思ったのを覚えています。交流は半年ほど続きましたが、あまり苦にならずに通いました。

いよいよ迎える日、Mちゃんは朝から大泣きして「行かない」と言って、乳児院を逃げ回りました。私はどうしたらMちゃんに伝わるのか必死に考えて、「弟のD君も後で来るよ。2人のためにリラックマのお布団を用意してあるよ」と伝ええると、Mちゃんは泣きやんで、「今からおうちに行く」と言ってくれました。あのときの喜びは今でも忘れられません。

家に来たばかりのMちゃんはトイレもお風呂も「怖い怖い」と泣いてばかりで本当に大変でした。食べられるものは、ウィンナーとエビフライだけでした。ただただ戸惑う私を励ましてくれたのは、先輩里親さんの「びっくりすることばかりだけど大丈夫、だんだん落ち着いてくるよ」という言葉でした。うちに来て1か月ぐらいたつと、私と主人がご飯を食べているのをMちゃんが見て、興味を持ってそれを食べてみたいと言ったのがきっかけです。

トイレやお風呂はずっと「怖い怖い」と言っていたんですけど、ある夜中に泣きながら私の枕元にMちゃんが来て、私の顔をのぞき込んで「トイレに行きたい」と言ったのでトイレに連れて行き、それがきっかけで使えるようになりました。その後に隣のお風呂をのぞいて、自分からお風呂場に入っていたことも覚えています。

【ファシリテーター】

その後、2歳の弟のD君を迎えることになりますね。そのときの

ことも教えていただけますか。

【里親】

D君は熱もよく出したし、病気もしてたくさんの病院にお世話になりました。でも姉と弟はとても仲よくて、2人が小学校1年生から3年生ぐらいになるまで夫と週末に公園や公民館、畑の野菜収穫体験に連れて行って、家族で楽しく過ごしていた思い出があります。

D君が小学校2年生のとき、学校で生い立ちの木という授業があって、自分の成長を振り返る内容なんですけど、そこで赤ちゃんのときに何を食べていたかを調べて書く宿題が出たんです。D君はバナナって書いたんですよね。クラスメイトから「おかゆじゃなくてバナナ」って驚かれて、そのことをおうちに帰って、ちょっと困った顔で私たち夫婦に話してくれました。

次はMちゃんですけど、小学校の高学年ぐらいになると難しい時期になってきて、表情が硬くなり、家族の中でも会話が減っていききました。D君はD君で友達関係で悩んだし、かんしゃく持ちでもあったし、一方で、長い時間沈黙するようなことも増えたりして、私自身どう関わればいいのか分からず余裕がなくなっていました。そんなときに支えになったのは、先輩里親さんや児相の職員さん、里親をサポートしてくださる職員の方の励ましでした。また、あるとき、児相のほうでの学習会があったんですけど、そのときに講師になった先生が児童精神科医の先生で、学習会が終わった後の個別相談で相談したところ、先生が「Mちゃんがあなたのほうに来るのを待っているだけじゃなくて、あなたのほうからMちゃんに近づいていかなきゃいけない」と言われたことがありました。その言葉に

私はとてもはっとしました。私は子供に何かを言ったら子供が嫌がるということがすごい怖かったんですね。自分からMちゃんと距離を置いていたことに気づかされた瞬間でした。

それ以降、意識して子供たちに声をかけたり、一緒に出かけたり、アニメを見たり、自分から子供たちに近づくようにしました。意外なことにMちゃんとD君はそれを嫌がらずに、むしろ懐いてくれるようになった気がします。

Mちゃんは、その後体調を崩したりとかして、中学校3年生の頃はずっと学校を早退していたんですね。なかなか学校に行くのが難しい時期が続いていて、そんなときにMちゃんが定時制高校に行きたいと自分で選んだのを覚えています。私は定時制高校というと夜間の学校しか知らなくて心配していましたが、先輩里親さんの里子さんが定時制高校にすごく楽しく通っているというふうに伺って、安心して通わせることができました。定時制高校はMちゃんに合っていて、後にD君もそんなMちゃんを見て同じ学校に進みました。

【ファシリテーター】

今、高校っていろんな種類がありますよね。定時制、普通科だけじゃなくて、通信制やサポート校など、そんな中でMちゃんが志望校を決めたきっかけはありましたか。

【里親】

学校からは高校の説明会に行くようにというふうに言われて、しぶしぶオンラインの説明会に参加しました。そのときに話を聞きながら、毎朝通うのは無理だと本人ははっきり実感したみたいです。そこで、Mちゃん自身が自分で調べて、定時制高校なら通えそうだ

と話してきました。当時はコロナ禍で学校見学に直接行くのが難しかったため、学校のホームページや校長先生の動画を見ていました。それがMちゃんのフィーリングに合ったみたいで、ここなら行けそうって言ってその学校が志望校となりました。

【ファシリテーター】

今、2人のお子さんは里子であることについてどう受け止めているかというのを伺いしてもよろしいですか。

【里親】

うちの子供たちは、里子であることの受け止め方、感じていることを時々私に話してくれることがあります。Mちゃんはよく最近使われる「支援」という言葉が苦手なんだそうです。支援されて、私たちはおかげで生活していますというのが、なんかまるでかわいそうみたいというふうに思うんだそうです。

一方でD君は、最近よく聞く「虐待」という言葉って強過ぎるんじゃないかなって、親が育てられなくても、施設とか里親に預けた時点で子供のことを考えているということじゃないって言っていました。D君は前向きに自分の育ちを受け入れようとしているんだと思って、とても驚きました。2人がそれぞれ自分の置かれた状況について自分の言葉で話すということに2人の成長を感じています。

【ファシリテーター】

MちゃんとD君とは一緒に暮らし始めて15年くらいですが、この15年を振り返ってどうですか。

【里親】

特に預かって初めの頃は、子育てから逃げたいなと思ったことが

時々ありました。大変な時期は、夫や母に愚痴を聞いてもらったし、先輩里親さんたちにも話して「あるあるだよね」って一緒に笑ったり泣いたりして気持ちが軽くなることもとても多かったです。

里親仲間からは「これだけやれたのはすごい」って言ってもらえたり、母から「もう何日も続いているね、よくやっているね」って言われたり、そうした言葉に支えられて次も頑張ろうって思えました。

【ファシリテーター】

今2人の将来についてどのようにお考えになられていますか。

【里親】

私が大切に考えているのは、子供たちが自分のルーツや実の家族についてどう気持ちを整理していくかということです。Mちゃんはこの3月に我が家を委託解除となったんですが、その前に実親さんのことを知ってしばらく放心状態だったことがあります。D君はあるとき、「自分の家族はこの家だから、生まれた家のことはそんなに知りたくない」と私の母に言ったこともあったそうです。

MちゃんもD君もとてもひょうきんな性格をしてよく冗談を言う子たちなんですけど、それぞれに実親さんへの思いがあって、めったに口にしないものの、悲しい気持ち、もやもやした気持ちを抱えているように私には見えます。ですが、人の気持ちは変わるものだと思うので、いつかもし家族のことを知りたいと思ったときには、私たち夫婦にはもちろんのこと、児童相談所やフォスタリング機関に相談できることを伝えています。困ったときはとにかく1人で悩まないで支援を受けながら進んでほしいと思っています。

私たち夫婦はMちゃんとD君が自分のペースで心の整理をしているように見守っていきたいです。

【ファシリテーター】

今日お集まりいただいた方々に向けて最後一言お願いできますか。

【里親】

以前と比べて、里親制度に関心を持ってくださる方が増えてきたなと感じています。それでもまだ里親家庭の数は足りていないとも聞いています。里親になってみたいけど自分にできるかなと迷っている方はきっと多いと思います。私自身、16年前に迷いながら参加した里親さんの体験発表がきっかけで自分もやってみようと思いました。もしあのとき発表会に行かなければ、今うちにいる子供たちとの出会いはなかったと思います。子供と出会うことは本当に幸せなことで、大変なこともあります、子供たちから教わったことがたくさんあり本当にありがたいなと思っています。

里親登録をしてから実際に子供を預かるかどうかはゆっくり考えてもいいんじゃないかなと私は思っています。ただ、登録をしておくことでいざというときに子供たちを支える準備ができたり、誰かの力になれることがあるかもしれないと思います。なので、無理のない範囲でまずは登録を考えてみてほしいなと思います。

もし話を聞いてみようかなと思われたら、児童相談所やフォスターリング機関の職員さんが優しく丁寧に説明してくださるはずです。話を聞くだけでも、今より里親制度が具体的にイメージできると思います。少しでも多くの方が里親制度に関心を持ってくださったら本当にうれしいです。

11 「みんなで育てる、みんなが育つ」

発表者：里親（40代）

家族構成：里親、委託児童（5歳Yちゃん）、実子1人

里親歴：5年

私は、普段は福祉や教育関係の仕事をしています。いわゆる事実婚と言われるパートナーシップの下で生活を営んでいます。私とパートナーの間には実子が一人いまして、今、小学生の低学年になります。実子が生まれてほどなくして里親登録をし、現在は3年前から一緒に暮らしている里子と一緒に、4人で生活を営んでいます。

まず、里親になろうと思ったきっかけです。私自身、子どもが育つ環境というのがもっと多様で開かれていたらいいなと思っていました。私はYMCAのキャンプ活動に子どものときから参加していたので、親や学校だけじゃなくて、いろんな大人たちや地域や社会の中で育っていくことの豊かさを、実体験を通して強く感じていました。

里親というと、養子縁組というイメージがありましたが、里親の研修を受ける中で、養子縁組だけではない養育家庭というものがあるということを知りました。学びを深める中で、子どもが社会の中でいろんな人に支えられながら育っていくという考え方、社会全体がチームになって子どもを養育するという理念が、自分自身がずっと持ってきた考え方と、どこか重なるところがあるのではないかと感じ、里親により強い関心を持つようになりました。

登録した後は、一時保護委託が最初の経験でした。里親に登録してから数か月ぐらいたった後、児童相談所の職員の方からお電話い

ただいて、家庭復帰を前提に調整している2歳のお子さんを1か月間だけ預かっていただけないかというご相談でした。

今でも覚えています、日々驚きと学びの連続でした。すぐに一緒に生活が始まりました。日中は機嫌よく遊んでくれて、食事も結構食べてくれるお子さんだったんですが、夜になるとしくしく泣き出して、「お母さん」とずっと泣きながら叫んでいました。今思えば、当たり前のことだったと思います。いきなり連れてこられた場所で、全く知らない大人たちと一緒に寝るとするのは、2歳の子どもにとって、怖かっただろうと思います。

定期的に児童相談所の職員さんが、「どうですか、大丈夫ですか」とお電話をしてくださいました。とにかく衣食住が提供されていて、一緒に健康に暮らせるだけで十分だから、と言ってくださって、その言葉に支えられた気がします。一緒に買物に行けるようになり、公園で楽しく遊んだりしているうちに、夜も一緒に寝てくれる日が増えてきました。

私たちには里子さんと1歳しか離れていない実子と一緒に暮らしていました。まだ小さかった実子と、わたしたちが里親として活動するということをじっくり話し合って決めたわけではなかったこともあり、一時保護は決められた1か月の期間で終了しました。幾つかの課題や難しさを感じるとともに、楽しさも感じられた日々でした。

現在一緒に暮らしている里子とは、じっくり交流する期間を設けていただきました。その子が住んでいた乳児院に、私とパートナーで週に一、二回通って一緒に遊んだりする時間を持ちました。数か月間交流期間があったんですが、これは私たちや里子だけでなく、

何より実子にとってもすごく重要なプロセスだったと思います。

そういう交流期間を経てやってきたYちゃんとの暮らし始めは、まあ大変の一言でした。最初の1か月、Yちゃんは終始しかめっ面でした。コロナ禍真ただ中に生まれた子どもなので、乳児院の中しか知らない幼児期を過ごしていました。交流中に、私たちのうちに遊びに来たときが生まれて初めて電車に乗った日でもあって、そのときは本当に目を丸くして驚いていました。一緒に生活するようになると、もう生活は一変します。目まぐるしく大きな変化がYちゃんの中には起きていました。緊張したり、驚いたりすることの連続だったんだろうなと振り返ってみて思います。当時、乳児院から大事に持ってきたおしゃぶりをくわえてないと、絶対寝られないという子どもでした。また、夜になると寝つけずに泣き出してしまうことが長く続きました。

だんだん生活が落ち着くにつれて、あるいは本人が成長していく過程の中で、おしゃぶりも要らなくなっ、て、ゆっくり眠るようになりました。今ではもう起こしても起きないぐらいじっくり寝る子どもになっています。

生活に慣れて私たちとの関係性が深まるにつれ、どんどん甘えるようになっていきました。もっと言えば、わがまま放題になっていきました。いわゆる試し行動もそれなりにありましたが、興味深いエピソードの一つとして、赤ちゃんごっこが毎晩繰り広げられた時期がありました。

私たちは4人で布団を敷いて、全員横になって大きな川の字みたいに寝るんですが、そのときに赤ちゃんごっこしたいと里子が言い

出すようになりました。何をするかという、仰向けになっている私のおなかの上にその子が乗かって、しばらくゆらゆらした後に、「うわあ、生まれた」と言って、ごろんと布団に転がって。そうしたら、すかさず私が、「ああ、かわいい赤ちゃんが生まれたね」みたいなことを言うと、とても満足そうにほほえむという、この一連の儀式のようなことを毎晩毎晩やりたがりました。

興味深いのは、なぜかこの赤ちゃんごっこを私（里父）とやりたがるということでした。私、実際の出産の経験がないんですけれども、もう500回以上の出産を、毎晩経験することになりました。おそらくYちゃんは、里母ともこの赤ちゃんごっこをやりたかったんだと思うのですが、多分、実子に対する遠慮のようなものがあったのかもしれないと感じます。目まぐるしい変化が続いているんですけれども、少しずつ愛着をお互いに形成し、信頼関係を築きながら、一步一步生活をしています。

今でも寂しいときや悲しいとき、あるいは実子と結構けんかをすると、Yちゃんは「私はこの家にいないほうがいいよね」といきなり言うてくることがあります。その度に、「いやいや、そんなことないよ。ここはYちゃんの場所で、いつまでもいられる場所で、私たちに存分に甘えてもいいんだ」ということを繰り返し、繰り返し伝えていきます。その言葉を言ってほしいんだろうなと自分たちは受け止めています。

里子のYちゃんも、新しい生活の中で本当に大きな揺れの中にありますが、ともに暮らしている実子も大きな揺れの中にありました。例えば頻尿や小学校への登校渋り、かんしゃくを起こすようなこと

もありました。年齢が3歳離れているとはいえ、突然自分だけの空間だった場所に小さな子がやってきて、自分のおもちゃ、自分の本、自分の場所、あるいは自分の親もシェアするということになって、混乱があったのだと思います。Yちゃんとの関係を構築していくことと同時に私たちが心を砕いたのは、私たちと実子との関係を改めて構築していかなければならないということでした。おもちゃの棚を分けてみたり、絵本に色別のシールを貼ってみたりいろいろなことを工夫しました。実子が里子に優しくするときもあって、それはきまって実子が安定していて、自分が満たされていると感じるときです。そういうときには周りにも優しくすることができるんだと思うので、実子のケアもすごく大切だと思っています。

交流当時から、私たちは実子も入れて里親家庭なので、里子のケアも実子のケアも一緒にやっていきたいと、職員さんに伝え続けていました。例えば、里子の生い立ちを一緒に整理していく作業の中で、里子だけではなく、実子に対しても同じように職員の方からお話をしてくださる機会を設けてくださいました。里親家庭というのは一体何なのか、親は里親をやっているけど、それはどういう思いでやっているのかということを絵本仕立てにしてくださって、実子に読み聞かせてもらいました。その中で、あなたの親は、変わらずあなたのことを大切に思っているんだよということを絵本をとおして伝えてくださったときに、それを聞いた実子が涙を流していました。実子は自分が愛されているということが分かって安心したと言っていて、やっぱり不安に思っていたのだなとそのときに思いました。今では、相談員の方も里子、実子どちらもよく気にかけてくだ

さって、すごくありがたく思っています。

里親家庭には、職員さんが家に来て打合せしたり、相談したりという機会が多いですが、実子からすると、またYちゃんの関係で来ているんだなと少し寂しい思いもあったようなので、フォスタリング機関の方と相談して、実子のためにも来ていただいて関係作りを定期的に行うようになりました。私たちは実子の存在なしには養育家庭の活動は続けられないので、今後も実子と里子とともにケアをしながらやっていきたいと考えております。

最後に、養育家庭を経験して、里親制度の理念に掲げられているチーム養育の意味をすごく実感しています。いつでも相談できる職員さんがいるのはもちろん、理解を示してくださる教育機関の方々や地域の方々に支えられて、自分たちが里親活動をやれているのだと思います。実子を育てているだけだと、定期的に相談員さんがやってきて悩みを相談したり子どもと遊んでくれることは、残念ながらあまりないことだと感じています。里親制度には、チーム養育の仕組みが基本設計されていますが、それは全ての子どもにとって大切なことだろうと思っています。また、私たち養育家庭もそのチーム養育の一人なのだと感じています。

私たちは、法律婚ではないパートナーシップなので、互いの名字も違うんですね。Yちゃんも実親の名字をそのまま使っているので、私たちの一つの家の中に3世帯あります。あまり一般的な家族の形ではないのかもしれませんが、狭い意味での家族の枠を超えた、私たちなりの家族というのもしっかり存在していて、それはそれですごく豊かなものだと思います。

里親というと、どうしても経験豊かな養育者だとか、余裕のある篤志家みたいなイメージがあるかもしれませんが、私も含めたリアルな里親というのは、日々の暮らしにとにかくてんてこ舞いで、一々いらいらしたり、落ち込んだり、悩んだり、右往左往する、そういう不完全な養育者の一人であると思います。

里子自身も親と一緒に生活できないかわいそうな子どもということでは全くなくて、いろんな人から愛情や関心を注がれて育つことのできる、そういう権利と可能性の持った子どもの一人なんだと思っています。

あるとき児相の職員さんが、実子を乳児院に預けたＹちゃんの実親さんというのはすごいんだと言っていました。子どものことを第一に考えて、乳児院を信頼して自分の子どもを預けてくれた。それは本当にすごい判断だったんだという言葉が忘れられません。

里親制度というのは、悪い親からよい親へ、望ましくない親から望ましい親へ、みたいなことでは全くなくて、実親も里親も職員さんも地域の人々も、みんなで一人の子どもを支えていく、そういう仕組みのことであって、養育家庭はその大切なチームの働きを担う一部なんだと思っています。

里親として登録している、していないということに関わらず、里親制度に関心を持ってくださる方々も含めて、みんながこのチーム養育の一員なのだと思います。今日ここに来てくださって、関心を持ってくださる方も、既にチームの一員だと私は感じています。いろんな形で里親として働くことができると思うので、それぞれに合った仕方と一緒にチーム養育を担っていくことができればうれしいなと思っています。以上です。ありがとうございました。

12「明るい未来へ」

発表者：里親（30代）

家族構成：里親、委託児童（9歳男の子）

里親歴：2年

私たち夫婦は結婚後、5年ほど不妊治療をしていました。私は、パートをやりながらの治療に大変疲れ切っており、ホルモン治療に入ると更にイライラや虚しさで涙が止まらず、自己否定をしたり、夫を責めたり、無気力になったりしていました。その逆も然りで、今回の受精は上手くいったから重い荷物は持たない、走らない、労働時間を減らすといった配慮をしながら、我が子への期待と喜びでいっぱいになることもありました。ベビー服の買い出し、母子手帳や保険証の手続き、入院用品の用意等を考えたり、夫と赤ちゃんの名前や今後の事を話し合ったりしている最中に、吐き気を催して更に期待が増したのにもかかわらず、後日の健診の結果に肩を落として病院の廊下で号泣したこともありました。

そのような日々が続き、不妊治療保険適用の終わりが見えてきた頃には、期待などはなくなっており、これ以上気落ちしないようにと内心どこかいつも冷めた自分がいました。というのも、不妊治療の終盤頃には、私の中に「里親」という2文字があったからです。治療中の終わりが見えない暗いトンネルの中にいた私に、やっと光が見えたと思えるそんな2文字でした。

里親の事は、テレビや知人の話で知ることができていましたが、深くは理解しておらず、まずは話だけでも聞きに行こうと夫に相談

したのは不妊治療が終わった頃でした。精子提供を伴う不妊治療は断固反対であった夫でしたが、里親に対しては、

「良いんじゃない。まずは色々聞いてみたりやってみたりしないと分からないからね。私たちに合うとなったら先に進めばいいし。」と、すんなりと受け入れてくれました。里親説明会に参加後、夫とあれこれたくさん話をして「里親の道」を決意し、約9か月で無事に里親登録となったのでした。

私たちは、養子縁組と養育家庭のダブル登録でした。とにかく心の準備として、里親として勉強になる講座案内に目を通し、月に1、2回は講座へ参加していました。里親になってから約2週間後に養子縁組の子どもの紹介がありましたが、養子縁組には手を挙げる里親さんがたくさんいらっしゃるので、毎回養子縁組のマッチングは残念な結果でした。そんな中、里親になって約4か月後に養育家庭の長期委託で6歳の男の子の打診の連絡を受けました。これが私達とK君の出会いとなりました。ワクワクとドキドキが止まらない中、K君との交流に向けて、いちばん大きい部屋をK君用に空け、部屋をすっきりさせるために危ないものは棚へしまうなど、受け入れのための準備をしました。また、フォスタリング機関の方から、子どもを預かってからは夫婦2人の時間が少なくなるため、委託前に思いっきり楽しむようにとアドバイスを受け、夫と映画館に行ったり、外食に行ったり、お酒を片手に未来について語り合ったり、とにかくK君を迎える楽しみや期待の方が勝っていたので、不安という気持ちはほとんどありませんでした。それは恐らく、不妊治療で子どもを授かることが一生できないと悟った時のどん底を知っているので、

どんな子が我が家に来て、この子が我が家に来てくれただけでも本当に奇跡で、子育てできることに感謝していたからだと思います。

一方、今までの講座で聞いていた話や、そこで出会った方の悩み等、様々な話を聞いていたので、不安や心配が全くなかったわけではありませんでした。時折、夫に弱音を吐いていましたが、いつだって前向きな夫は、

「ピンチはチャンスだよ！ピンチこそもっとよく変わるチャンスかもしれない。」

と良きアドバイスをしてくれました。今となっては、本当にそうだと思います。

いよいよK君との交流が始まりました。最初の交流は30分ほどでしたが、無邪気に遊んでいるK君を見て、この子の背負ってきたものの大きさを考えてしまい、泣きそうでうまく笑えなかったことを覚えています。K君が声をかけた私と夫に快く反応してくれた時は本当に嬉しかったです。フレンドリーと聞いていただけあってすぐにボール遊びに入ってくれました。受け入れてもらえるまでに数日必要だと思っていましたが、あまりにもあっさりで拍子抜けしました。後に、児童相談所の方に、特定の大人との愛着の関係を築いてこれなかったことがK君の行動に繋がっていると聞きました。

交流には、私一人で向かう事もありました。K君に会うと、あまりの可愛さに不安や緊張はどこへやら、楽しく遊ぶことができました。その中でビックリさせられたのは、「ルービックキューブ」を全面揃える小さな姿でした。とにかく動作も早ければ頭の回転も速い、そんな印象を受けました。

交流が進むと、色々な姿を見せてくれるようになりました。本読みやお絵描きなど、2人でする遊びになると、K君は、怖いもの、お化けが出るような本ばかりを選んできて、怖い絵を指さして、

「これ見て!!怖いね。」

と言って読み終えると、また本棚に走り怖そうな絵の本をお探していたので、私がニコニコな絵の本を手に取りお勧めすると、迷うことなく却下されました。小学校ではあまり授業に集中できず教室から飛び出すことが多かったと聞いていましたが、K君は選んだ本をスラスラ読み上げており、一年生なのにと驚きました。ふと、本の裏表紙に描かれていた子どもの絵と、お母さんの絵を見て、

「この子どもが僕で、このお母さんが〇〇さん（里親さん）だね！」と私のことを指さし、満面の笑みで言われたとき、実親さんがいるのに、私のことを「お母さん」と呼ぶことは一般的には考えられないことなので、K君がどんな状況下にいるのかをととても理解できました。その後も、猫、蛇、火事で燃える家、津波で家が飲み込まれる絵を描いており、K君の心が垣間見えたそんな絵でした。また、人形を思いっきり床に叩きつけ暴言を吐くこともあり、私はそんな彼をぎゅっと抱きしめたくまりました。

次の週、夫と久しぶりに交流に行くことができたので、どんな展開になるのかとても楽しみにしていました。しかし、K君はなかなか現れません。児童相談所の方から、ご機嫌が斜めだと説明を受け、暫くすると絶叫しながらの登場でした。初めて一緒に食べる昼食も、「箸なんて使わない！手で食べてやる！！！」

と興奮し、ご飯もスープも全部手掴みで食べ、あちこち走り回り、

暴力的で、ボールを強く投げたり、指で「死ね」のジェスチャーをやってきたりと激しい行動でとても不安になった一日でした。夫とはじめての経験に戸惑い、

「この状況がずっと続くようなことがあったらどうする？」とよく話し合いました。突然目の当たりにしたK君の行動にショックを受けましたが、K君の立場に立てば、突然育った家を出て、知らない人達とたくさん会って、いつ家に帰れるのか分からない日々を過ごしているのだから当たり前の行動だったと思います。6歳のまだ小さい体で、この複雑な事情の中を一生懸命生きている、そんな姿だったのだと思います。その後、K君自身が落ち着いてから交流を再開することになり、2週間ぶりに会ったK君はとても穏やかで、私たちも安心しました。そうして、K君が我が家で交流をスタートすることになりました。

交流当日、はじめてのわが家に少し緊張気味のK君でしたが、押し入れに何が入っているのか興味深々で、人形を手に取り一人遊びをしたり、児童相談所から持ってきた玩具と一緒に遊んだりし、昼ごはんも3人で仲良く食べました。

1泊2日の交流も何事もなく楽しく過ごせていたのですが、長期外泊で気になる点が出てきました。特に気になったのは、夜の睡眠中にとにかくうなされて、本当は起きているのではないかというくらいハッキリ話す寝言でした。泣き叫ぶように何かを拒絶するような大きい声で、恐ろしい夢を見ていることは明白でした。一定の間隔でうなされているため、私は睡眠不足になりました。きっとK君も寝不足なのではないかと心配し聞いてみると、全くうなされているこ

とを自覚しておらず、いつも寝ているという返答でした。児童相談所の方から夜尿があると聞いていましたが、あんなうなされ方をしていたら夜尿も当然だろうと思いました。

長期外泊からすぐに委託されることとなった私たちは、K君の新しい学校の準備や、学校や近隣への挨拶、その他手続き等含め、想像以上に多忙な生活を送っていました。委託されてから1週間もたたないうちに緊張しながらも登校できたK君。1年生の期間は何の問題もなく過ごせていました。

一方、夜尿と夜驚はずっと続いていました。寝る前にお互いの夢の話をするようになった頃、K君がどんな夢を見ているのか話してくれました。その夢は、「お母さんの生首が追いかけてくる、とにかくお母さんに見つからないように逃げている。」というような夢だと話でした。

毎日寝る前に一緒に本を読み、いろんな話をしている時に、私たち夫婦は、いつだってK君の頼れる存在だし、味方であることを伝えるようにしていました。そして、幼児を育てるように手をかけて養育していこうと夫と話し、ひとりでできることでも一緒に取り組んでいくようにしています。それは、今も変わりません。

しかし、毎日どんなに寄り添って、たくさん手をかけていてもトラブルはつきもので、ある日、夫とK君が初めて衝突しました。度々、室内の壁をよじ登ることを注意されていたK君は、その日も常に室内を動き回っていました。何度注意されても壁をよじ登っていたせいで、ついに壁に「ヒビ」が入り、夫が普段よりも大きい声で注意したというものでした。

私が気づいてK君と夫の元へ行った時には、K君は机の下に潜り込み、小さく丸まって耳を塞ぎガタガタ震えながら首を左右に振って泣いていました。初めて見る異様な光景に私はすぐに駆け寄り、K君の背中をさすりながら夫は怒っていないこと、なぜ夫が何度も注意をしたのか、その理由を丁寧に伝え納得してもらいました。ゆっくり丁寧に伝えると、K君はしっかり理解してくれる一面があり、これを機に、どんなに頭にくることがあっても、「ゆっくり、丁寧に」を私たちは心掛けるようになりました。その後、学校でトラブルが起きた時も、担任の先生に「ゆっくり話せば必ず理解できる子である」ことを伝え、今の担任の先生もK君を理解してくれています。

K君が我が家に来て約9か月。泣いたり、怒ったり、笑ったり色々ありました。今では習い事をはじめ、興味を持った資格の勉強をし、学校ではたくさんのお友達と遊び、学び、たくさん食べ、規則正しい生活をおくることで、よく眠れるようになり、充実した日々を過ごせています。

K君を預かる前に参考になると思っていた話とは、かけ離れていることもありましたが、

「みんな違って みんないい」。

人と同じことを求めるのではなく、K君らしさをのばしていきたいと思います。そんなK君に寄り添いながら、これからも3人で手を取り合って、明るい未来を築いていきたいと願う今日この頃です。

13「里親を志した日、里親としての日々」

発表者：里親（30代）

家族構成：里親、委託児童（5歳男の子M君）

里親歴：3年

今年の12月で里親になってからようやく丸3年が過ぎようとしています。まだまだ新米の里親です。家族構成としては、私、夫と、現在5歳になる男の子の里子が一人おります。

私が大きな家族が欲しいと思ったのが、里親になるきっかけでした。私は子供時代、シングルマザーの母一人だけの家庭で育ちました。子供時代は家に一人であることが多く、母は仕事で夜遅くまでいなくて寂しくて、誰かいてくれないかな、遊ぶ相手が欲しいなという思いでずっと子供時代を過ごしました。

成人後、大きな家族が欲しいという願望はとて強くなりました。なので、私は25歳のときに、児童養護施設に勤めることにしました。児童養護施設というのは、様々な理由で家族と暮らせない3歳から18歳の子供が生活をする場所です。どうしても閉鎖的なイメージを持ってしまいがちですけれども、でも、施設で暮らしている子供というのは、そこらの街中にいる子供と何ら変わりはありません。あほらしいことで笑い転げたり、時には大人に甘えてみたり、感情のまま怒りをぶつけてみたり、本当にただの子供らしい子供たちでした。

しかし、私が施設職員としてそこで2年半過ごしているうちに、里親を志すきっかけになる、ある事件が起きました。

私は、その施設の中で一人の高校1年生の女の子ととても仲がよかったんです。仮にNさんとしましょう。そのNさんは、私が掃除や洗濯、施設で仕事をしているときに、「ねえねえ、聞いてよ」と言ってよくお話をしてくれる女の子でした。話の内容は大体学校のこととか、あとは友達のこと、時には施設の不満だったり、本当に他愛もない話だったんです。でも、Nさんとのお話、毎日のやり取りが私にとっては本当に楽しくて、愛おしい時間でした。

そんなあるとき、Nさんが学校から帰ってきたときに、私の横に静かに来ました。「どうした？」と言ったら泣いているんです。声を出さずに、ただただ涙を流していました。よくよく話を聞いてみると、泣いていた理由としては施設を出たい、この施設が辛い、とにかく出たいんだよって。そうかそうかと。施設にいる子はママとパパと暮らしたい、普通の家族が欲しい、みんながそう思います。それはもう当たり前のことです。誰もがそう思います。

私はそのときNさんを宥めることしかできずに、何と返事したか覚えていないんです。もう5年以上も前なんですけどね。ただただそのときのことで覚えているのは、自分がNさんに「いいよ、ここ出ていきなよ」と、「どうにかしてやるよ」と、そういうふうに返事できなかった。そのときの無力感が今でも残っているんです。だから私は里親を志しました。

私は、施設職員から里親になりたいと思って施設を退職しました。施設が良い悪いという話ではなくて、子供全員のことを考えて平等性を重んじる施設より、私には里親のほうが向いていた、ただそれだけのことなんです。

そして、私は旦那と結婚をして、自分が将来里親になりたいことを話しました。これが確か28歳ぐらいのことだと思います。そのとき、里親になりたいと旦那に言ったら、すごくすんなりいいよと言ってくれました。あまりにすんなりだったので、その後何度も何度も確認したのを覚えています。

なんであのとき快諾してくれたのか。旦那の当時の心境を聞いたところ、彼は里親というものに対しての好奇心と、私の夢を応援してみたいという気持ちが強かったそうです。心配とか不安はなくて、子供に対するプロの私がサポートしてくれると信じてくれていたから、不安は感じなかったそうです。すんなりいいよと快諾してくれる家族はなかなかいませんので、本当によかったなと思います。

そして、児童養護施設を退職しましたが、施設とのつながりを持ち続けたかったので、フレンドホームに申し込みました。フレンドホームというのは、様々な事情で児童養護施設や乳児院で生活している子供たちを、学校がお休みの期間などに数日間お預かりする制度です。

今、私はフレンドホームに申し込んで、児童養護施設の小学生男児二人と交流をしております。月に一度、委託中の5歳の男の子のほか小学生男子2人が来て、男の子が3人になるときがあるので、フレンドホームの日はすごく家がにぎやかになります。動物園に連れていったり、博物館へ行ったり、あと公園にふらっと行ってみたい、家で手巻き寿司を作ってみたりします。フレンドホームの子供からしたら、時々行くおばあちゃんの家みたいなものだと思います。

いきなり里親は不安だなと思う方、家で毎日預かるのは厳しいか

もと思う方はフレンドホームから検討してみるのもいいかもしれないですね。

さて、フレンドホームをしばらく行いながら、里親登録と研修が終わると、すぐに児童相談所から子供を預かれませんかと打診が来ました。それは里親登録して3日後のことでした。子供をM君としましょう。そのM君と面会は一度だけしました。その1週間後にはM君がもううちに来ます。ベッドと服、身の回りのものを大慌てでそろえました。

M君はおうちに来て、すぐに私たちに懐いてくれました。びっくりしました。M君は自分のことをいきなりしゃべり出しました。好きなおもちゃはブロックで、アンパンマンのアンパンがどうたらこうたらでと本当に自分のことをたくさん話してくれました。気難しい子供をたくさん見てきましたが、あれだけすんなり、本当にかわいい子はなかなかいないと思いましたね。

でも、仕事で子供のお世話をしているとしても、やっぱり家に毎日いるのはちょっと違うんですよ。それは育児している方たちのほうがご存じだと思うんですけど。M君をお預かりしてようやく2年が経とうとしていますけれども、毎日、子育ての悩みは尽きません。どうやったら早く寝てくれるかなとか、30分後にも言ったことを覚えてくれているのはどうしたらいいかなとか、もう毎日、旦那とM君のことでお話しします。寝ているときが一番かわいかったですよ。

これはうそをつけないので言ってしまうかもしれませんが、時々、なんで私わざわざ苦労して里親をしているのかなと思うときがあるん

です。M君は私じゃなくて別の里親さんに育ててもらったほうが幸せなんじゃないかなと、本当に悩んだときもあるんです。でも、そうやってM君のことで毎日毎日悩むのも、M君を連れて公園に手をつないで出かけて歌を歌うのも、大好きだよと夜寝る前にお互いに言い合うのも、M君がいるからこそ全部全部、感じることなんです。私たちは自分の子供はいないので、何もかもが新鮮で、M君が来てくれたからこそ、多くの経験と成長を私たちがM君から与えてもらっているんです。

M君は、私たちの前では愛されたくてたくさん頑張ってしまうんです。いつもママに会いたいと思うんですよ。でも私たち夫婦の前では、M君がそれを口に出して言うことはありません。でも、こども園の先生の前では「ママに会いたい」って泣くそうです。M君は今5歳ですが、彼は小さな体の中で本当にたくさんたくさん闘っています。すごくすごく頑張っています。そんな彼を見て、いじらしく思っ^て愛情を与えて、多くの体験をさせて、彼の親御さんに堂々とバトンタッチができるその日まで彼とともに暮らします。

里親になり、私は施設職員時代に言えなかった、子供がこれやりたい、公園行きたい、スーパー行きたいから連れて行ってよというときに、間髪入れずにいいよと言えることが本当にうれしいです。

そして、時に私たち里親がつらいとき、そんなときは児童相談所の方、里親支援専門相談員の方、また、里親の仲間たちが私たちの悩みを聞き、助けてくれます。

正直に言うと、私は、里親をして子供を助けてあげたい、立派に育ててあげたい、そんな大層な信念は持ち合わせていないんです。

ただただ自分がやりたいからやっているだけなんです。子供をお世話しているときが一番好きで楽しいんです。子供は本当に大人にできない発想や行動をします。それがたまらなく面白く、子供を見て笑っている自分が大好きなんです。だから私は里親をやっているし、これからも続けていきます。

今日ここにお越しいただいた方は、いろいろな思いで来ていただいていると思います。里親をこれからやりたい、すばらしいです。里親になりたいけど、なれないかもしれない、それもすばらしい。親と暮らせない子供のために何かやってあげたいと行動をしている、それだけでもいいんです。里親を補助する機関に属してみたり、児童福祉の子供に寄附してみたり、ボランティアで子供と遊んでみたり。

親と暮らせず寂しい思いをしている子供、声に出せない悲鳴を上げている子供は、今この瞬間にもいます。決して大人が行動するのを待ってはくれません。だから、その子供のために何かできることを考えて、一步を踏み出し、行動することがとても大切です。

皆様が今日この場にきた小さな一步が、数か月後や十数年後に子供の笑顔につながると思うかもしれないと思うと、私はとっても素敵で幸せな気持ちになります。まだまだ私も経験したいこと、勉強したいことがたくさんあります。だから頑張っていきます。

ご清聴ありがとうございました。

養育家庭（里親）Q&A

◆養育家庭（里親）になるにはどのような資格が必要ですか？

特別な資格は必要ありませんが、いくつかの要件があります。

【代表的な要件】

- 都内在住の夫婦（※）で心身ともに健康な方
- 経済的に困窮していないこと
- 児童の養育について、理解、熱意並び愛情を備えていること
- 申請者の住環境が、家族の構成に応じた適切な環境であること
 - ※ 事実上婚姻関係と同様の事情にある方や、同姓パートナーも含みます。
 - ※ 配偶者がいない場合でも、一定の条件の下で里親登録できます。

◆預かる期間はどれくらいですか？

- 養育期間は数年にわたる場合もあれば、数か月の場合もあります。
- 短期間（おおむね1か月以上2か月未満）のみ預かる養育家庭もあります。

◆養育に係る費用は支払われますか？

- 子供の年齢に応じて、生活費や教育費等が支給されます。
- 養育家庭（里親）には手当が支払われます。

◆里親への支援はどのようなものがありますか？

- 児童相談所が中心となって関係機関と共に支援を行います。
- 里親同士が集う相互交流の機会があります。
- 里親自身の休息が必要な場合には、子供の養育から一時的に離れて休息できる制度があります。
- 研修などに参加し、養育に必要な知識を学ぶことができます。

里親になりたい方、少しでも興味がある方はお近くの児童相談所まで！

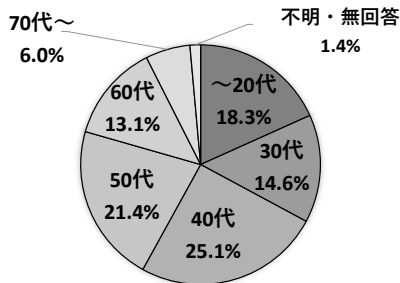
（お問合せ先はお住まいの自治体によって異なります。巻末をご参照ください。）

体験発表会アンケート結果

全回答 N=1,318

1. 体験発表会参加者について

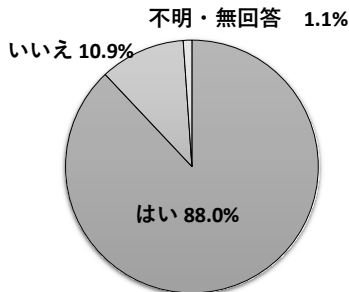
(1) 年齢構成



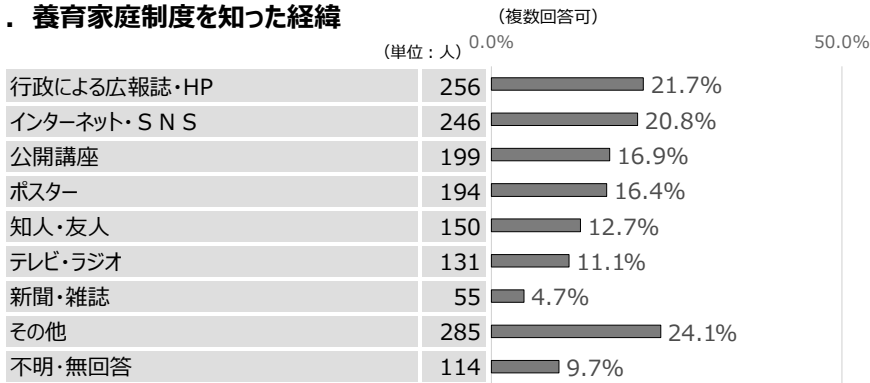
(2) 所属 (一部複数回答有) (単位: 人)

一般	520
里親	82
フレンドホーム	2
民生児童委員	70
自治体職員	135
施設・関係団体職員	157
学生	148
その他	47
不明・無回答	35

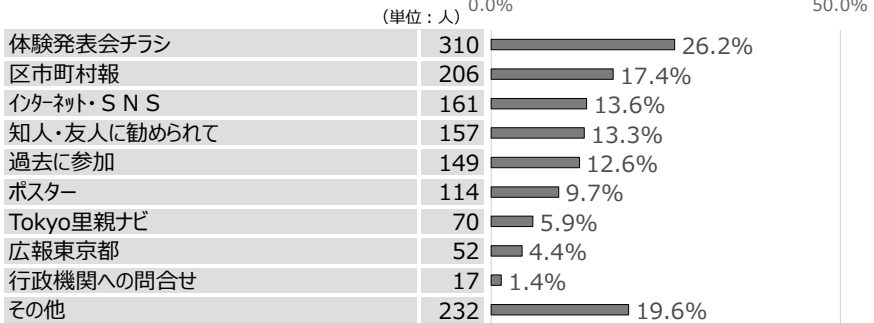
2. 養育家庭制度を知っていましたか？



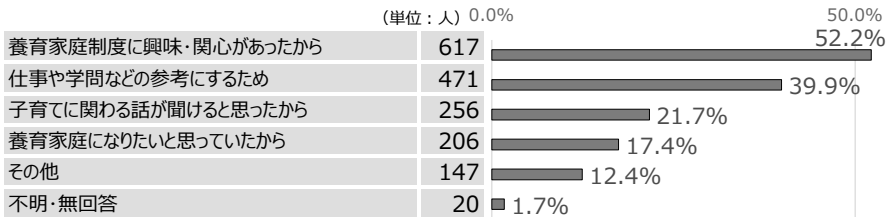
3. 養育家庭制度を知った経緯



4. どこで、体験発表会を知りましたか？（複数回答可）



5. 今日の体験発表会に参加した動機をお聞かせください。（複数回答可）



6. 体験発表会の感想をお聞かせください。

いってらっしゃい、おかえりなさい、と同じ人から当たり前に言ってもらえる居場所があることの大切さ、普通の生活が続いていくことの大切さを改めて感じました。将来里親になりたいと考えておりますので、その気持ちをさらに強くしました。私も実子がございますので、里母さんと実子さんのお話が聞けたことも有意義でした。（40代、一般）

里親さんの体験談にとっても感動し、途中で涙が止まらなくなりました。
とても貴重なお話をありがとうございました。（40代、一般）

子ども達が温かい関わりの中で育っている様子が伺えました。真実告知や思春期の葛藤など里親家庭特有の悩みはありましたが、子育ての喜びや悩みはどの家庭にも共通するものだと感じ、里親子さんの存在が身近に思いました。（30代、一般）

実体験を交えたお話をたくさんお聞きすることができ、非常に学びを深めることができました。ありがとうございました。（20代、一般）

制度について関心あり参加させて頂きました。ご夫婦のお話のおかげで、初めての知識も抵抗なく楽しく聞くことが出来ました。登録について前向きになりました。（30代、一般）

ご参加いただきまして、ありがとうございました！

お住まいの地域を管轄する児童相談所が担当になります（東京都以外も同様です）。令和8年9月1日時点

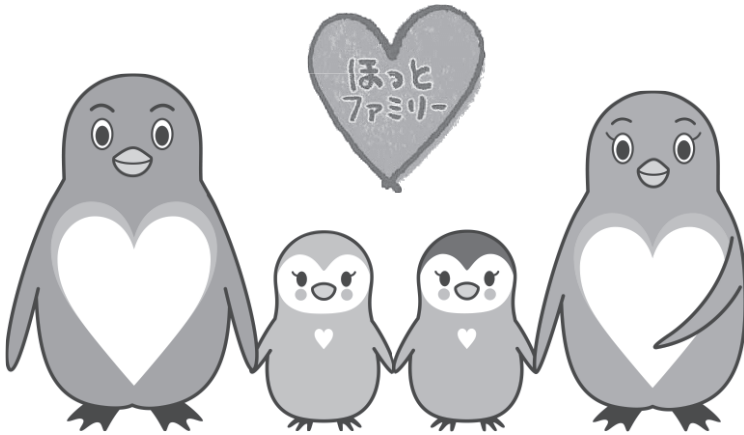
お住まいの地域	児童相談所名	所在地・電話番号
千代田区、中央区、新宿区、台東区、渋谷区、目黒区、島しょ	児童相談センター	〒169-0074 新宿区北新宿4-6-1 03(5937)2316
北区	北児童相談所	〒114-0002 北区王子6-1-12 03(3913)5421
大田区	大田児童相談所	〒143-0015 大田区大森西2-3-22 03(5763)5364
立川市、青梅市、昭島市、国立市、福生市、あきる野市、羽村市、瑞穂町、日の出町、檜原村、奥多摩町	立川児童相談所	〒190-0023 立川市柴崎町2-21-19 042(523)1321
杉並区（令和8年10月31日まで）、武蔵野市、三鷹市	杉並児童相談所	〒167-0052 杉並区南荻窪4-23-6 03(5370)6001
墨田区、江東区	江東児童相談所	〒135-0051 江東区枝川3-6-9 03(3640)5432
小平市、小金井市、東村山市、国分寺市、西東京市、東大和市、清瀬市、東久留米市、武蔵村山市	小平児童相談所	〒187-0002 小平市花小金井1-31-24 042(467)3711
八王子市、日野市	八王子児童相談所	〒193-0931 八王子市台町3-17-30 042(624)1141
足立区	足立児童相談所	〒123-0845 足立区西新井本町3-8-4 03(3854)1181
多摩市、府中市、調布市、稲城市、狛江市	多摩児童相談所	〒206-0024 多摩市諏訪2-6 042(372)5600
練馬区	練馬児童相談所	〒176-0012 練馬区豊玉北5-28-3 03(6915)8253
町田市	町田児童相談所	〒195-0075 町田市山崎1-2-17 042(851)9357

児童相談所を設置した下記の特別区については、区の児童相談所が該当区を管轄します。

また、今後、杉並区が令和8年11月1日に児童相談所を設置する予定です。

児童相談所名	所在地	電話番号	児童相談所名	所在地	電話番号
港区児童相談所	〒107-0062 港区南青山5-7-11	03-5962-6500	荒川区子ども家庭総合センター	〒116-0002 荒川区荒川1-50-17	03-3802-3765
世田谷区児童相談所	〒156-0043 世田谷区松原6-41-7	03-6379-0697	板橋区子ども家庭総合支援センター（児童相談所）	〒173-0001 板橋区本町24-17	03-5944-2374
中野区児童相談所	〒164-0011 中野区中央1-41-2	03-5937-3289	葛飾区児童相談所	〒124-0012 葛飾区立石2-30-1	03-5698-0303
豊島区児童相談所	〒171-0051 豊島区長崎3-6-24	03-6758-7910	江戸川区児童相談所（愛称 はあとポート）	〒132-0021 江戸川区中央3-4-18	03-5678-1810
品川区児童相談所	〒140-0001 品川区北品川3-10-9	03-6712-8261	文京区児童相談所	〒112-0002 文京区小石川3-14-7	03-3811-5241

ほっとファミリーは養育家庭の愛称です。



Tokyo 里親ナビ

—子どもと里親の暮らしを知るサイト—

<https://tokyo-satooyanavi.com/>

里親ナビ



養育家庭(里親)体験発表集

令和8年9月発行

登録番号(8)42

発行 東京都福祉局子供・子育て支援部育成支援課
東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話03(5320)4135 ファクス03(5388)1406

印刷所 東京都同胞援護会事務局
東京都墨田区両国四丁目1番8号
電話03(5669)0261



古紙配合率70%再生紙を使用しています
石油系溶剤を含まないインキを使用しています

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。